岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 112

田益新田遺跡
青谷5号墳

一般県道岡山・賀陽線(吉備新線)
建設に伴う発掘調査

1996

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 112

田益新田遺跡
青谷5号墳

一般県道岡山・賀陽線(吉備新線)
建設に伴う発掘調査

1996

岡山県教育委員会

序

主要地方道岡山賀陽線（吉備新線）は、吉備高原を東西に貫く岡山県の新しい幹線道路として計画され、吉備高原周辺市町の産業に重要な役目を果たすものと期待されております。現在、吉備新線のうち吉備高原都市と岡山空港を結ぶ路線はすでに開通していますが、残りの国道53号線バイパスまでの路線についても早期の開通が各方面から期待されています。

岡山県教育委員会は、吉備新線建設工事に先立ち、その予定地内に所在する田益新田遺跡と青谷５号墳の保護・保存について関係当局と繰り返し協議及び調整を図ってまいりましたが、路線上に当たる部分についてやむをえず記録保存の処置を講ずるための発掘調査を実施しました。

田益新田遺跡は弥生時代から古墳時代を中心とする集落遺跡です。遺跡の遺存状態はあまりよくありませんでしたが、弥生時代後期から古墳時代初頭を中心とする建物や溝、土壙等を検出しました。青谷５号墳については、古くは『横井村誌』にも記載がある古墳であり、乱掘が著しいことが予想されましたが、須恵器などの遺物が多数検出され、７世紀初め頃の横穴式石室墳であることがわかりました。この報告書が今後の地域史解明の資料として、また文化財保護の一助として活用されるならば幸いです。

最後に、発掘調査の実施、報告書の作成に当たっては、岡山県文化財保護審議会の近藤義郎・水内昌康両先生をはじめ、岡山県岡山地方振興局、地元の関係各位から賜りましたご指導とご尽力に対し、感謝の意をあらわすものであります。

平成８年３月

岡山県教育委員会
教育長　森　崎　岩之助

例　　言

1．本書は、岡山市田益に所在する田益新田遺跡および青谷５号墳の発掘調査報告書である。

2．両遺跡は吉備新線建設工事に伴い、岡山地方振興局の委託により岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した。

3．発掘調査は、田益新田遺跡を岡山県古代吉備文化財センター職員槙野芳典・氏平昭則・岡本泰典が担当して平成５年４月１日から同年９月10日まで実施し、青谷５号墳は同センター職員延堂　守・氏平が担当して平成６年４月１日から同年７月12日まで実施した。なお調査面積は田益新田遺跡2,070㎡、青谷５号墳383㎡である。

4．発掘調査・報告書作成に際して、下記の方々から有益なご教示・ご助言をいただいた。記して謝意を表する次第である。

　新納　泉・乗岡　実・弘田和司

5．遺物写真撮影には江尻泰幸の協力を得た。

6．本書の執筆は、平成７年４月から10月にかけて文化財センターにて氏平があたった。

7．報告書に関係する出土遺物、実測図、写真等は岡山県古代吉備文化財センターで保管している。

凡　　例

1．本書で使用した標高は海抜高、方位は磁北である。

2．本書第１図には国土地理院発行の1/50,000地形図「岡山北部」を改変して使用した。

3．青谷５号墳土層および土器観察表における色調は『新版標準土色帖(1993年版)』（農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）によっている。

4．従来田益遺跡と呼称してきたもののうち53号線北バイパス・吉備新線調査分は字名より田益新田遺跡と呼称する。吉備新線調査区は小字に従って西側の53号線北バイパス接続部分を国作（こんさく）調査区、東側旧道接続部分を宝仏（ほうぶつ）調査区とする。

5．青谷古墳群における各古墳の呼称について、資料によっては整合しないため対応表を作成して以後の助けとしたい。なお本書では基本的に『岡山市遺跡地図』中の呼称に従う。

横井村誌		岡山県埋文包蔵地カード		岡山市遺跡地図
三十三号塚(青谷塚)	→	青谷古墳群１号墳(青谷塚古墳)	→	青谷５号墳
三十二号塚	→	青谷古墳群３号墳	→	青谷３号墳
三十一号塚	→	青谷古墳群２号墳	→	(記載無し、現存を確認)
二十九号塚	→	青谷古墳群４号墳	→	(記載無し)

目　　次

序

例言

凡例

目次

第1章　調査の経緯と調査体制……1

第2章　地理的・歴史的環境……2

第3章　調査の概要

第1節　田益新田遺跡　国作調査区……5

第2節　田益新田遺跡　宝仏調査区……21

第3節　青谷5号墳……32

第4章　まとめ……42

遺物観察表……44

図版目次

第1図　周辺遺跡分布図(1/50,000)……2

第2図　「青谷塚」略測図(約1/100)……2

第3図　調査区配置図(1/4,000)……3

第3章　第1節　田益新田遺跡　国作調査区

第4図　遺構配置図1(1/300)……4

第5図　遺構配置図2(1/300)……5

第6図　土壙1(1/30)・出土遺物(1/4)……6

第7図　土壙2(1/30)……6

第8図　土壙3(1/30)……6

第9図　溝1断面(1/30)・出土遺物(1/4)……7

第10図　河道1断面(1/80)・出土遺物(1/4)……7

第11図　建物1(1/80)・出土遺物(1/4)……8

第12図　建物2(1/80)……9

第13図　建物3(1/80)……9

第14図　建物4(1/80)……9

第15図　建物5(1/80)……9

第16図　建物6(1/80)……10

第17図　建物7(1/80)……10

第18図　井戸1(1/30)・出土遺物(1/4)……11

第19図　井戸2(1/30)……12

第20図　井戸3(1/30)……12

第21図　井戸3出土遺物(1/4)……13

第22図　土壙4(1/30)・出土遺物(1/4)……14

第23図　土壙5(1/30)……14

第24図　柱穴1(1/30)・出土遺物(1/4)……15

第25図　柱穴2(1/30)・出土遺物(1/4)……15

第26図　溝2断面(1/30)……16

第27図　溝3断面1、2、3(1/40)
・出土遺物1(1/2)……16

第28図　溝3出土遺物2(1/4)……17

第29図　溝3出土遺物3(1/4)……18

第30図　溝3出土遺物4(1/4)……19

第31図　河道2断面(1/80)・出土遺物(1/4)……20

第32図　土壙6(1/30)……20

第3章　第2節　田益新田遺跡　宝仏調査区

第33図　遺構配置図1(1/300)……21

第34図　遺構配置図2(1/300)……21

第35図　溝4断面(1/30)・出土遺物(1/4)……22

第36図　溝5断面(1/30)……22

第37図　河道3出土遺物(1/4)……22

第38図　河道4出土遺物(1/4)・(1/2)……22

第39図　建物8(1/80)……23

第40図　建物9(1/80)・建物8,9出土遺物(1/4)……24

第41図　建物10(1/80)・遺物出土状況(1/30)
・出土遺物(1/4)……24

第42図　建物11(1/80)……24

第43図　井戸4(1/30)……25

第44図　井戸4出土遺物(1/4)……26

第45図　土壙7(1/30)・出土遺物(1/4)……27

第46図　土壙8(1/30)・出土遺物(1/4)……27

第47図　土壙9(1/30)・出土遺物(1/4)……27

第48図　溝6出土遺物1(1/4)……28

第49図　溝6出土遺物2(1/4)……29

第50図　溝6断面1、2(1/30)……29

第51図　溝6出土遺物3(1/4)……30

第52図　溝6出土遺物4(1/4)……31

第53図　溝10出土遺物(1/4)……31

第54図　溝7出土遺物(1/4)……31

第55図　溝7断面(1/30)……31

第56図　溝8断面(1/30)……31

第57図　溝9断面(1/30)……31

第58図　溝10断面(1/30)……31

第59図　溝11断面1(1/30)……31

第60図　溝11断面2(1/30)……31

第3章　第3節　青谷5号墳

第61図　調査前地形測量図(1/300)……32

第62図　墳丘測量図(1/150)……32

第63図　青谷5号墳石室(1/50)……33・34

第64図　青谷５号墳南断面(1/50)……35
第65図　青谷５号墳北断面(1/50)……35
第66図　青谷５号墳東断面(1/50)……36
第67図　青谷５号墳西断面(1/50)……36
第68図　石室平面図(1/50)……37
第69図　遺物出土状況・須恵器、土師器(1/60)……38
第70図　遺物出土状況・鉄器、その他(1/60)……38
第71図　石室内出土須恵器(1/4)……39
第72図　石室内出土須恵器・土師器(1/4)……40
第73図　石室内出土耳環(1/2)……40
第74図　石室内出土管玉(1/1)……40
第75図　石室内出土刀装具(1/2)……40
第76図　石室内出土鉄器(1/3)……41
第77図　石室内混入遺物(1/2)……41

写真図版目次

田益新田遺跡

写真図版１　(上)井戸１(南から)
(中)建物１・溝２(北から)
(下)建物２・溝３(北東から)
写真図版２　(上)建物８(北西から)
(中)土壙８(北から)
(下)溝４・５・６(西から)
写真図版３　建物１・10、井戸１・３・４、
土壙１・４、溝３、柱穴１・２
出土土器(1/4、一部1/6)
写真図版４　井戸４、土壙８、溝６・７
出土土器(1/4、一部1/6)

青谷５号墳

写真図版５　(上)遠景(南東から)
(中)調査前状況(北から)
(下)墳丘検出状況(西から)
写真図版６　(上)石室内中央(西から)
(中)石室内奥壁付近(西から)
(下)石室(東から)
写真図版７　須恵器・土師器(1/4)
写真図版８　鉄器(1/3)、耳環・管玉・刀装具(1/2)

第１章　調査の経緯と調査体制

吉備新線は、加茂川町・賀陽町にまたがる吉備高原都市と岡山空港・岡山市街を結ぶ幹線道として計画された路線である。吉備高原都市と岡山空港を結ぶ路線は昭和63年に開通したが、岡山空港と市街地を結ぶ路線は53号バイパスと前後して開通することが計画されていた。

吉備新線路線上には田益新田遺跡、青谷５号墳の２遺跡が当たり、前者は53号バイパスとの合流部で避けることができず、後者は迂回が困難であることから記録保存の処置を講ずることになり、平成４年に岡山地方振興局建設部から岡山県教育委員会文化課に依頼があった。平成５年４月、振興局、文化課、岡山県古代吉備文化財センターの間で協議があり、文化財センターが２遺跡の調査を行うことになり、田益新田遺跡の調査から着手した。

田益新田遺跡ではトレンチ調査と全面調査を行った。国作調査区東側谷部のトレンチ調査では遺構は検出できなかった。全面調査部分には未買収地があったが、土地所有者の承諾を得て調査を行った。平成５年６月、振興局との協議で53号バイパス東側の旧道接続部分についても発掘調査が必要であるということになり、引き続き７月初旬から旧道接続部分調査へ移行し９月初旬までで終了した。しかし青谷５号墳周辺の買収が完了しないことから、青谷５号墳は翌年度調査となった。平成６年４月からは青谷５号墳の発掘調査を始め、７月上旬に終了した。

発掘調査

1993（平成５）年度

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助
教育次長	黒崎　一秀

文化課

課　長	渡辺　淳平
課長代理	松井　新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）	高畑　知功
主　査	時長　　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	横山　常實
次　長	葛原　克人
（総務課）	
課　長	北原　　求
課長補佐（総務係長）	小西　親男
（調査第１課）	
課　長	正岡　睦夫
課長補佐（第１係長）	松本　和男
文化財保護主事	槙野　芳典（調査担当）
文化財保護主事	氏平　昭則（調査担当）
主　事	岡本　泰典（調査担当）

1994（平成６）年度

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助
教育次長	岸本　憲二

文化課

課　長	大場　　淳
課長代理	松井　新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）	高畑　知功
主　査	若林　一憲

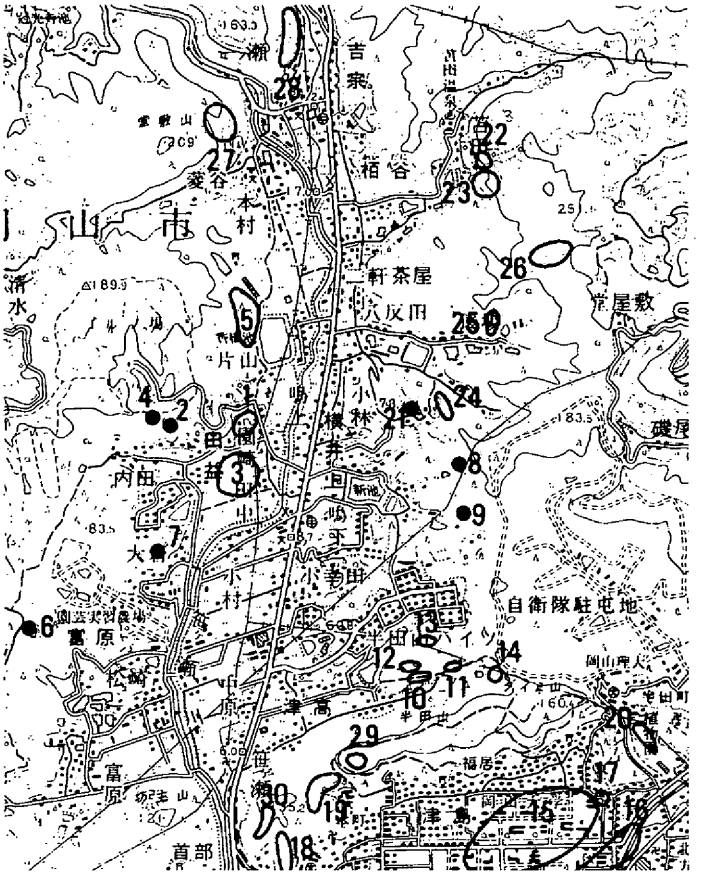
岡山県古代吉備文化財センター

所　長	河本　　清
次　長	葛原　克人
（総務課）	
課　長	丸尾　洋幸
課長補佐（総務係長）	杉田　卓美
（調査第１課）	
課　長	正岡　睦夫
課長補佐（第１係長）	松本　和男
文化財保護主任	延堂　　守（調査担当）
文化財保護主事	氏平　昭則（調査担当）

第２章　地理的・歴史的環境

田益田中遺跡・青谷５号墳は岡山平野の北部、津高盆地の西縁に位置する。盆地の中央を笹が瀬川が南流し、盆地の出口は坊主山と半田山の丘陵で仕切られる。

これまでの調査で、津高盆地には笹が瀬川支流の河道が多く存在し、その間に微高地が形成され集落が営まれていたことがわかっている。田益(田中)遺跡[1]では弥生中期の土壙墓をはじめ竪穴住居、建物、井戸が見られた。また田益(新田)遺跡[2]では弥生時代後期末～古墳時代初頭の建物、井戸の他に弥生時代前～中期の河道を検出した。一方丘陵部にも集落が多く存在する。大岩遺跡[3]では弥生時代中～後期の住居11軒、後期の袋状土壙12基があった。新田上遺跡・猪ノ坂東遺跡[4]では弥生後期前半～中頃の住居・段状遺構・貯蔵穴があった。

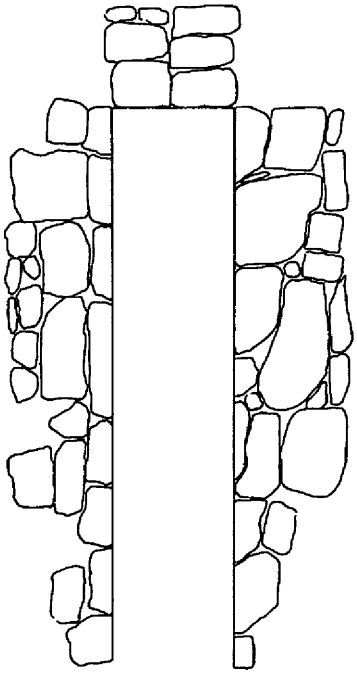


第１図　周辺遺跡分布図(1/50,000)

１.田益新田遺跡　２.青谷５号墳　３.田益田中遺跡　４.青谷３号墳　５.西山古墳群　６.富原西奥古墳　７.大岩遺跡・池田家墓所　８.白壁古墳　９.白壁奥遺跡　10.佐良池古墳群　11.擂鉢池１・３号墳　12.新田上遺跡・古墳　13.猪ノ坂東遺跡・古墳　14.奥池古墳群　15.津島岡大遺跡　16.津島江道遺跡　17.朝寝鼻貝塚　18.七つ丸墳墓群　19.都月坂墳墓群　20.一本松古墳群　21.横井お台場遺跡(古墳)　22.苫田古墳群　23.奥池上古墳群　24.猿場池南古墳群　25.猿場古墳群　26.猿場北奥古墳群　27.平岩古墳群　28.横山古墳群　29.半田山城　30.烏山城

津高盆地内の前期古墳の調査例は少ない。太刀・四獣鏡を出した猪ノ坂東古墳[4]は直径15mの円墳で、粘土槨箱形木棺と木棺直葬の２つの主体部が存在した。

古墳時代後期になると古墳の数は激増する。1940年代に記された横井村誌[5]人文誌の「史蹟及古蹟」の項で、古墳については横穴式石室墳など40基の古



第２図　「青谷塚」略測図(約1/100)

墳の規模と位置が記されている。一部の古墳については石室展開略図を掲載し、青谷５号墳も「三十三号青谷塚」として記載されている（第２図）。戦後になって行われた横山８号墳[6]の調査では、６世紀後半の須恵器をはじめ水晶切子玉などの玉類が原位置で発見された。６世紀中葉～７世紀前葉にかけての古墳群である西山古墳群[2]では埋葬施設は横穴式石室５基、竪穴式石室３基、箱式石棺３基、木棺直葬１基の多岐にわたる。富原西奥古墳[7]は１辺７～８ｍの方墳で、石室は全長302cmを測る横穴式石室である。木棺が１基確認され、時期は７世紀の第２～３四半期頃とされる。白壁古墳は直径19ｍの円墳、主体部は長さ12ｍの横穴式石室で６世紀後半に築造され７～８世紀まで追葬されたと考えられる。また奥池・擂鉢池古墳群[4]では調査された横穴式石室のほとんどが７世紀前～中葉である。奥池４号墳などの竪穴石室は横穴式石室より古い傾向を示す。最も新しい奥池３号墳は外護列石を有し６角形墳と想定される。

古墳時代以降、谷間を利用して製鉄が営まれる。白壁奥遺跡[8]では、製鉄炉または鍛冶炉３基、炭窯６基などを確認した。津高団地の調査では奥池遺跡の製鉄炉２基の他、６世紀後半～７世紀の炭窯７基が確認された。このように古墳時代後期以降の津高盆地は製鉄を主軸に独自の勢力を築いていったことが推測されるのである。

第３図　調査区配置図(1/4,000)

註

（１）岡田　博「田益遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』22　1992　岡山県教育委員会

（２）村田秀石・内藤善史・福田正継「田益遺跡・西山古墳群」『岡山県埋蔵文化財報告』22・23　1992・93　岡山県教育委員会

（３）松岡浩太郎「大岩遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』22　1992　岡山県教育委員会

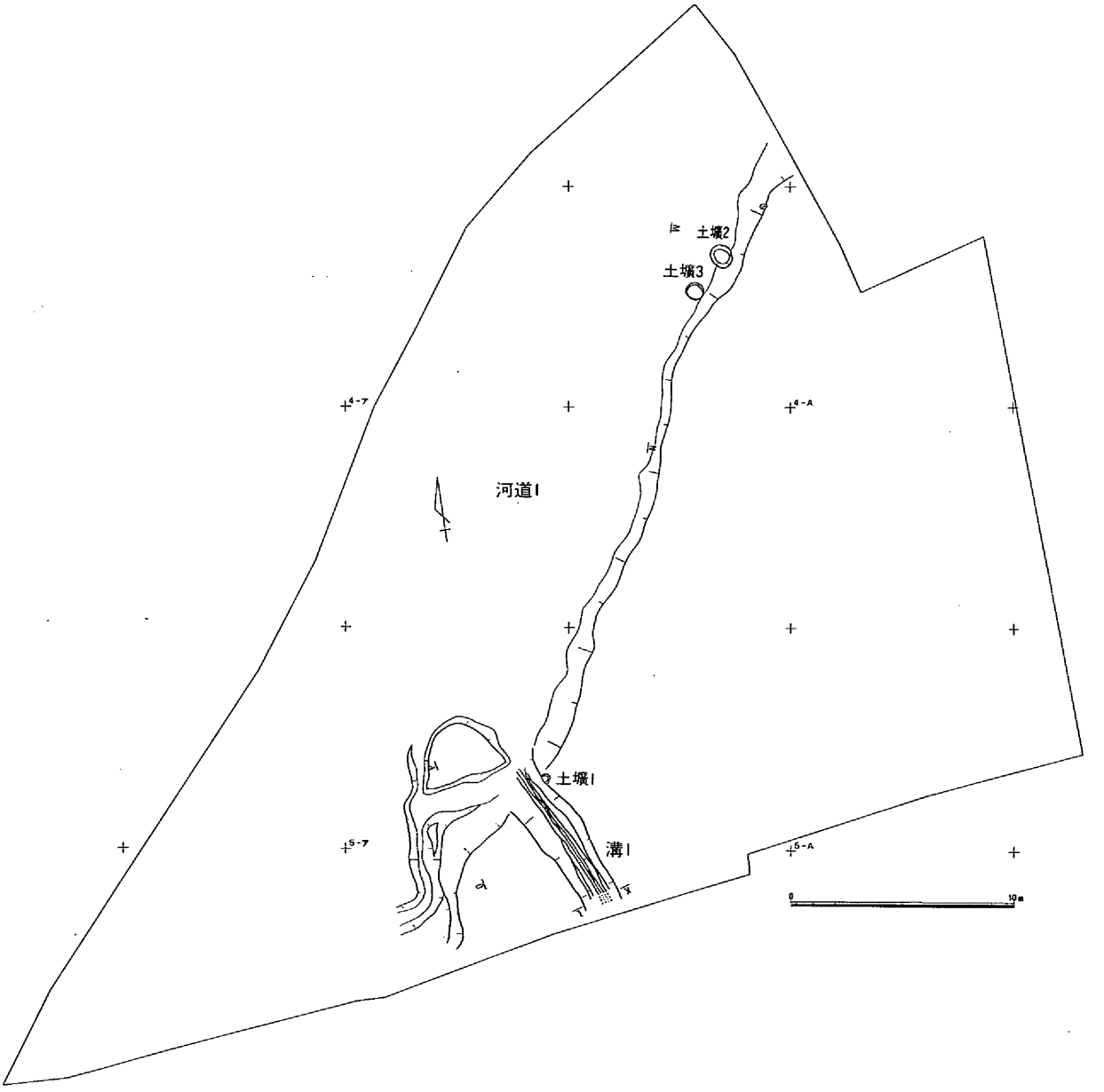
（４）岡山市教育委員会が津高団地造成のため1991年８月まで調査を行った。乗岡　実氏のご教授を得ました。

（５）「史蹟及古蹟」『横井村誌　人文誌』　昭和16年(1941)

（６）角田　茂「備前津高村横山第８号墳調査概報」『古代吉備』第１集　1958

（７）松本和男「富原西奥古墳・白壁古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』83　1993　岡山県教育委員会

（８）下澤公明「白壁奥遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』22　1992　岡山県教育委員会



第４図　遺構配置図１（1/300）

第3章　調査の概要

第1節　田益新田遺跡　国作調査区

(1)　調査区の概要

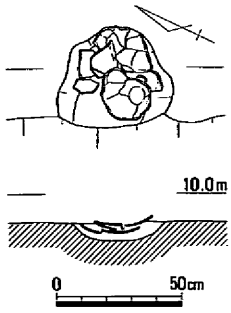
当調査区の基本層序は第31図の河道2断面図で示した。表土下は灰褐色砂質土が15cm程度堆積していて、その直下がすぐ弥生時代中期から中近世までの遺構面となる。それらの基盤層は黄褐色～白褐色粘質土である。弥生後期から古墳時代の遺構埋土は暗灰褐色等の色調の粘・砂質土である。弥生中期の遺構埋土は淡灰褐色砂質土で、溝1周辺で確認できた。中期の遺構は溝1周辺のみで全体的な広がりはない。中近世の遺構は土壙6以外には明確でなく、その埋土には遺構面上層の灰褐色砂質土が落ちこんでいる。

第5図　遺構配置図2(1/300)

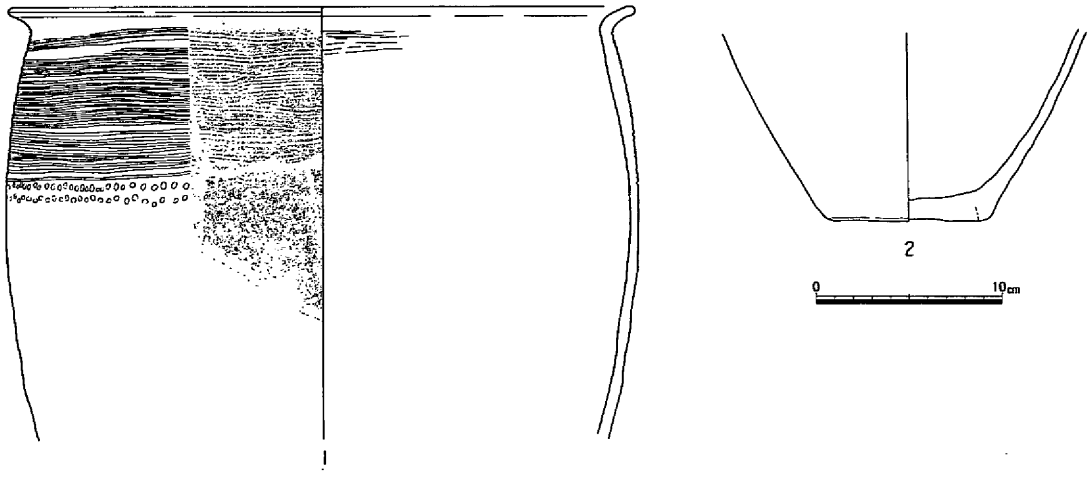
（２）　弥生時代前・中期の遺構と遺物

土壙１（第６図）

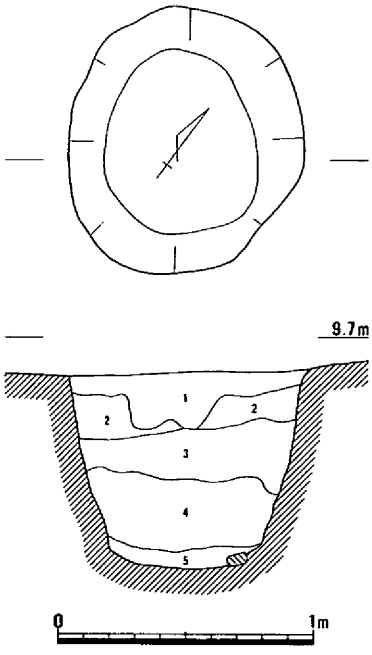
溝１の東肩に位置する土壙である。掘り方は検出面で南北45cm、東西40cm以上の不整なだ円形を呈する。深さは検出面から10cm弱、断面は椀形になる。掘り方底面の海抜高は9.8mであった。遺物の出土状況は甕数個体が内面を上に向け、折り重なった状態であった。１は外面平行櫛書文の下に列点文を施し、弥生時代中期前葉と考えられる。



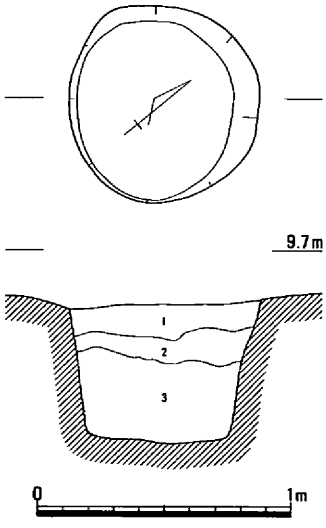
埋土：淡灰褐色砂質土



第６図　土壙１(1/30)・出土遺物(1/4)



第７図　土壙２(1/30)



第８図　土壙３(1/30)

土壙２
１.淡黄灰色砂質土
２.淡黄灰白色粘土(マンガン少し沈殿)
３.黄灰白色粘土(マンガン沈殿)
４.淡灰褐色粘土
５.淡灰色砂質土

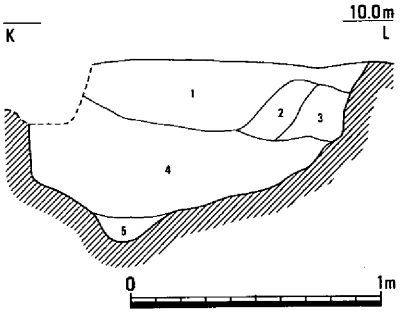
土壙３
１.淡黄灰色砂質土
２.黄灰白色粘土(マンガン沈殿)
３.淡灰色粘土

土壙２・３（第７・８図）

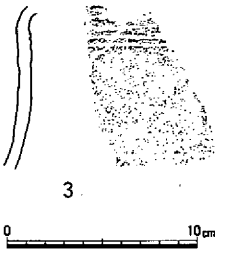
いずれも河道１の北東に位置し、河道１の下がりに切られる土壙である。双方の土層の１層は河道１の流れこみである。土壙２の規模は検出面で107×90cmのだ円形、深さは78cm、底面海抜高は8.8mである。土壙３は検出面で直径75cmの円形、深さは55cmで底面の海抜高は8.9mである。いずれも遺物は見られなかった。時期は河道１よりも古いと考えられる。

溝１（第４・９図）

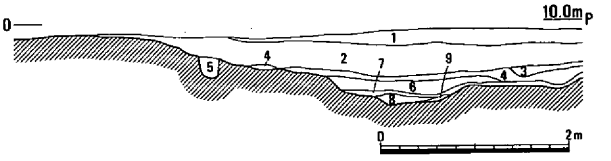
溝１は調査区の南側に位置し、河道１に切られる。検出面で幅165～200cmを測る。１度以上の改修があり、改修以前の底部が溝状に残っている。深さは改修前が検出面から70cm程度あったが、改修後は60cm程度である。底面海抜高は改修前が9.1mである。出土した遺物は少ないが、**3**は外面口縁直下にヘラ書き沈線が認められ、時期は弥生時代前期であると考えられる。溝１と土壙１は当初土壙１の方が古いと見ていたが、遺物より溝１の方が古いと考えられる。



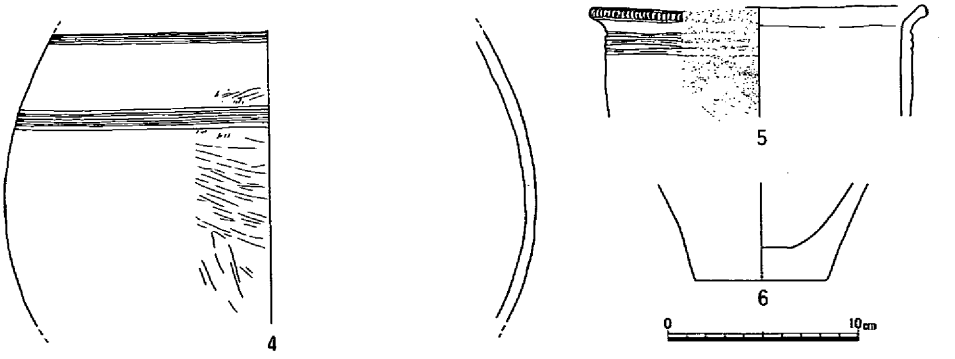
1．淡灰黄褐色粘質土（細砂含む）
2．淡灰白褐色細砂（やや粘質）
3．淡灰黄褐色細砂（やや粘質）
4．淡灰白色細砂（炭化物含む）
5．淡灰白色粘土（炭化物、木質、３cm大の礫含む）



第９図　溝１断面(1/30)・出土遺物(1/4)



1．淡灰褐色砂質土
2．淡灰茶褐色砂質土（マンガン多い）
3．淡灰茶褐色細砂（２と色調似る）
4．淡灰色細砂
5．灰褐色粘質土（炭化物含む）
6．淡灰白色細～粗砂
7．黒色粗砂（非常に堅くしまる）
8．茶灰色細砂
9．茶褐色粗砂



第10図　河道１断面(1/80)・出土遺物(1/4)

河道１（第４・10図）

調査区の北側に砂層の堆積があり、これを弥生時代前期の自然河道と考えた。北東側の対岸は未調査であるが、谷部の堆積が迫っていることから調査区外の近い位置にあると思われる。流路の方向は東から西であったと思われる。東側では底面が平坦で深さは検出面から40cm程度であった。対照的に西側の流路は起伏に富んでいて、深さは最大85cmもあった。河道内には遺物は少ない。**4**の壺は外面に櫛書文、**5**の甕は外面に３条のヘラ書き沈線を施すもので弥生時代前期と考えられる。

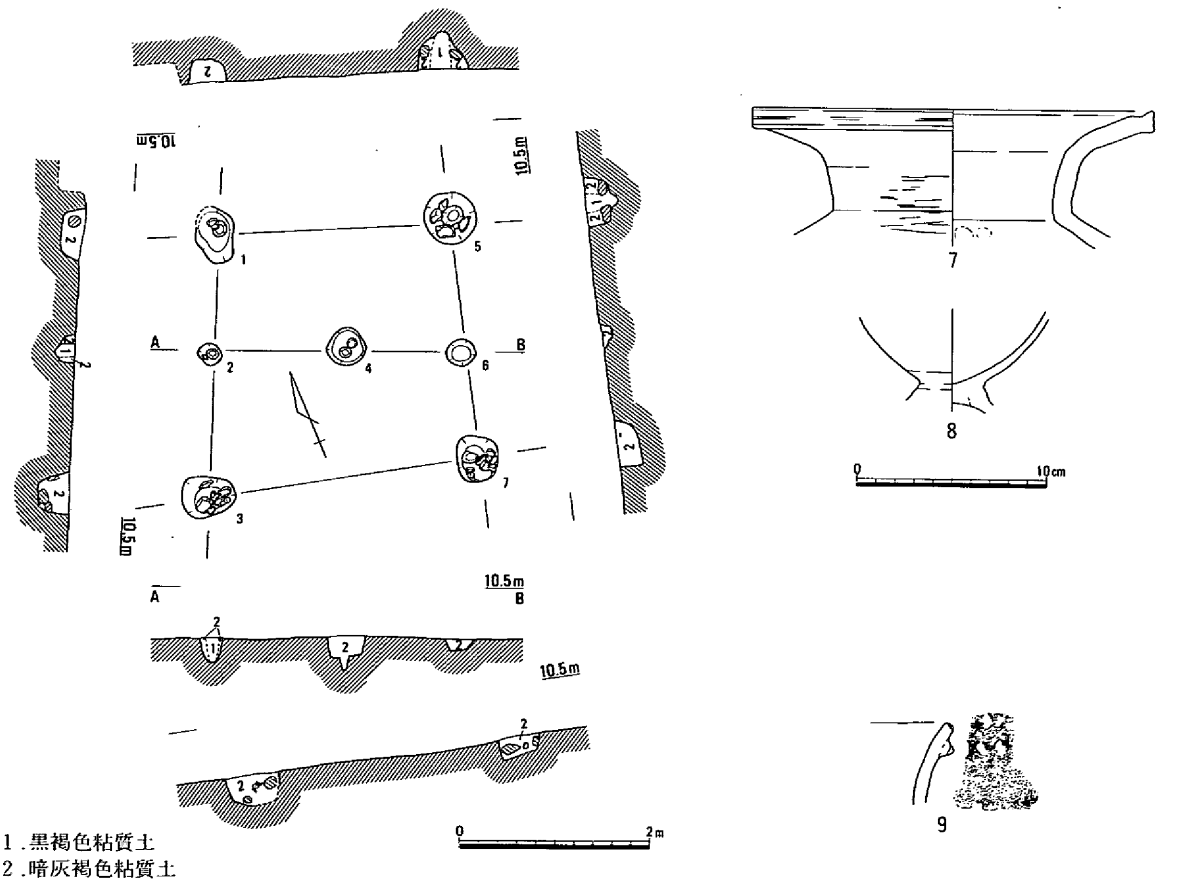
（３）　弥生時代後期から古墳時代前半の遺構・遺物

建物１（第11図、写真図版１中）

建物１は調査区北端に位置する２×１間、総柱の掘立柱建物である。南を溝２が流れ、土壙４が南東に位置する。土層断面で、柱痕が認められるものは２層が置き土、１層は流れこみと考えてよいだろう。柱穴内に10cm大の礫があるものが多いが、これらは柱を支えるためのものと考えられる。柱穴は検出面で直径25～60cmの円・だ円形で、深さは検出面から10～30cmを測り、底面の海抜高は9.6～9.8ｍを示す。遺物は**7**がＰ(柱穴)5、**8**がＰ1、**9**がＰ3から出土した。**9**は混入と考えられる。**7**・**8**からこの建物の時期は弥生時代後期末葉であると考えられる。

建物２（第12図、写真図版１下）

建物２は調査区北西側に位置する一部２×１間の掘立柱建物である。柱間は東西が南北に対して



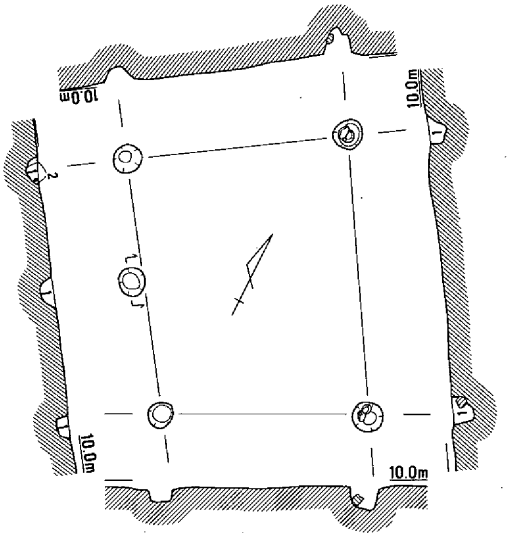
１.黒褐色粘質土
２.暗灰褐色粘質土

第11図　建物１(1/80)・出土遺物(1/4)

50～60cm短く、全体的形状は南北に長い台形を呈する。柱穴は検出面で30cm程度の円形、深さは検出面から15～20cmで底面海抜高は9.65～9.8mである。遺物は見られなかった。

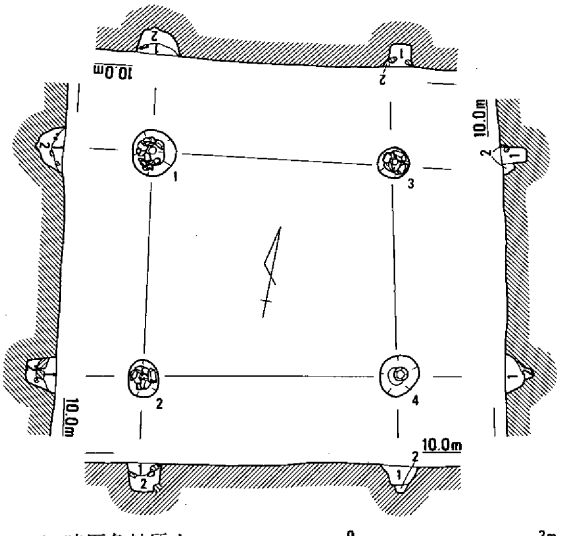
建物３（第13図）

建物３は調査区南端、溝３東側にあった１×１間の掘立柱建物である。柱間は東西が南北に対して30cm長く、東西にやや長めの長方形を呈する。柱穴は30～40cmの円・だ円形で、検出面からの深さは30cm、底面海抜高は9.6mを測る。柱穴に入っている礫は柱の支えとして機能していたものと考えられる。遺物は検出されなかった。



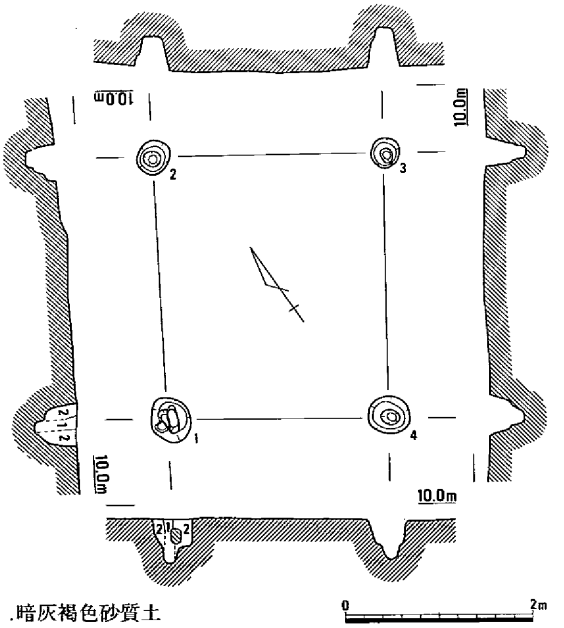
１.黒褐色粘質土
２.淡灰褐色粘質土

第12図　建物２(1/80)



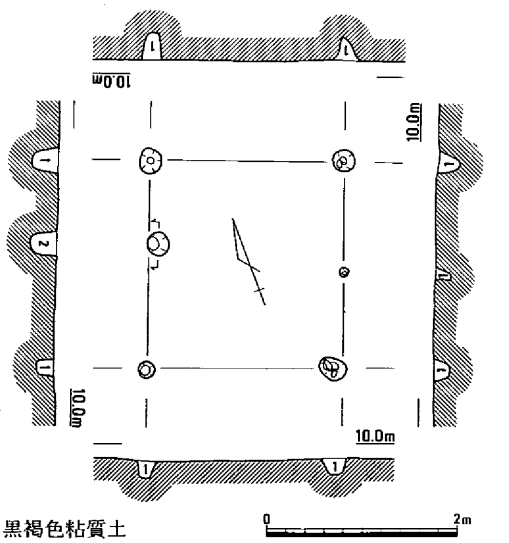
１.暗灰色粘質土
２.淡黄褐色粘質土

第13図　建物３(1/80)



１.暗灰褐色砂質土
２.暗茶灰褐色砂質土

第14図　建物４(1/80)



１.黒褐色粘質土
２.灰褐色粘質土

第15図　建物５(1/80)

建物４（第14図）

建物４は調査区の中央部、建物５と６の間に位置する１×１間の掘立柱建物である。いずれの柱穴にもある底部の窪みは柱痕であると考えられる。土層が明らかなＰ１では窪んだ部分の土層が異なり、柱が抜き取られた可能性が考えられる。柱穴は検出面で直径30～45cmを測る円形、深さは検出面から30～40cm、底面海抜高は9.4mである。遺物は見られなかった。

建物５（第15図）

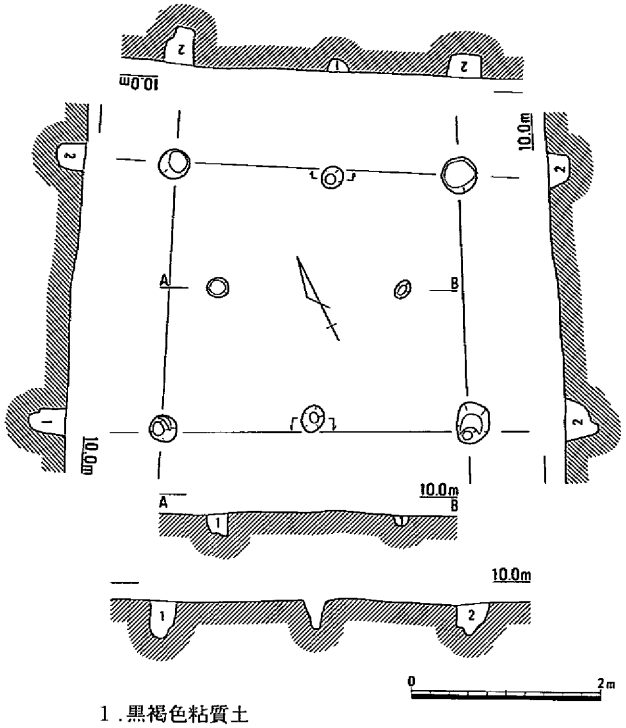
建物５は建物６・４の南に位置する掘立柱建物である。１×１間と考えられ、間の柱穴は建物に入らない可能性もある。柱間は２m前後を測り、ほぼ正方形の柱穴配置である。柱穴は検出面で15～25cmの円形、深さは検出面から15～30cmで底面の海抜高は9.6m前後を呈する。遺物は出土しなかった。

建物６（第16図）

調査区の中央、井戸１・３の南に位置する変則２×１間の掘立柱建物である。外側１×１間の内側に４つの柱穴が菱形に位置する。柱間は東西が南北に対し30cm程度長めである。柱穴の規模は検出面で20～40cmの円・だ円形で、深さは検出面から10～40cm、底面海抜高は9.4～9.7mを測る。

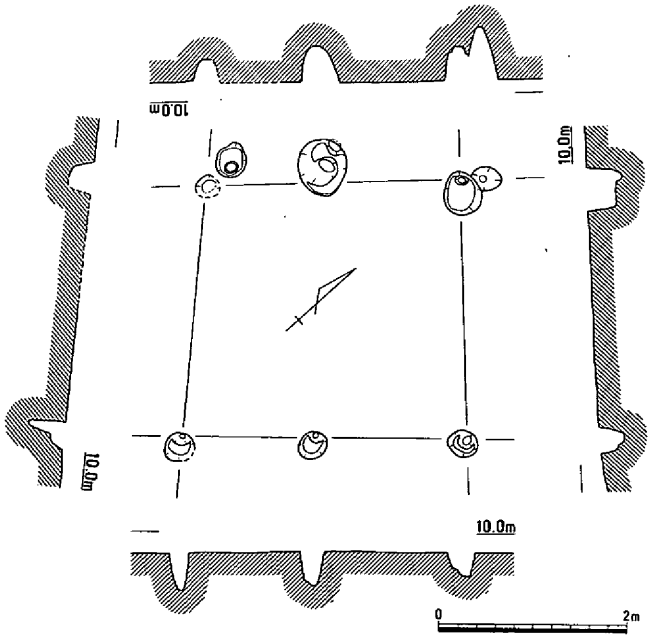
建物７（第17図）

調査区南東、河道２北側掘り方に切られる形で検出された２×１間の掘立柱建物である。南東側の柱穴列は早くから現場で確認していたが、北西側は調査後に復元したものである。柱穴の規模は、検出面で20～60cmの円・だ円形、深さは検出面から25～40cm、底面の海抜高は9.5m前後を測る。南側の柱穴列で遺物が出土している。



1.黒褐色粘質土
2.黒褐色粘質土（黄褐色土ブロック含む）

第16図　建物６（1/80）

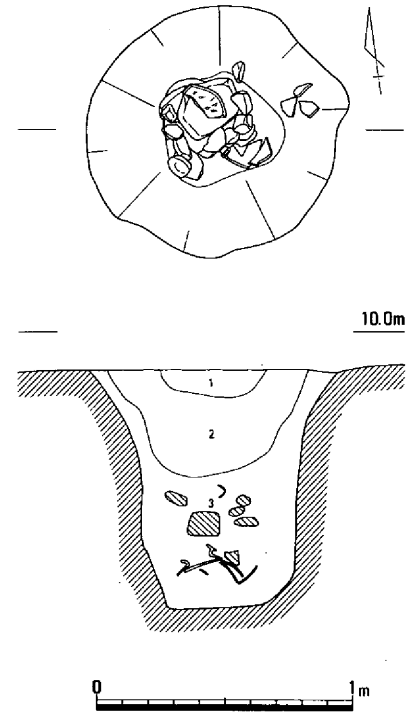


第17図　建物７（1/80）

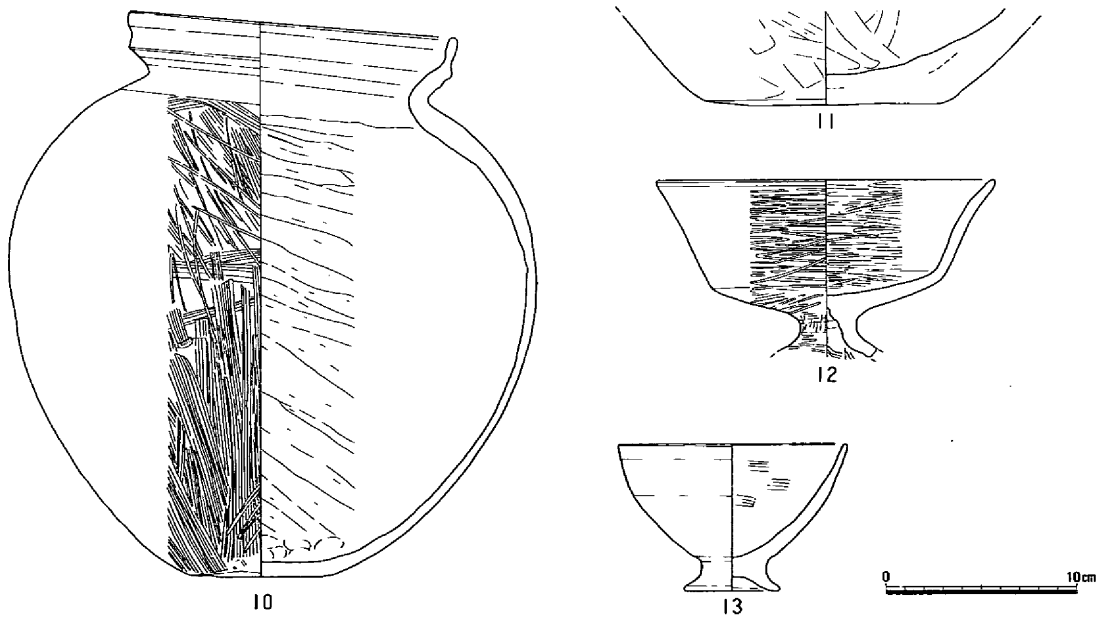
建物１～７については５を除いて柱間距離が類似していることから、ほぼ同時期の弥生時代後期末葉の建物と考えられる。

井戸１（第18図、写真図版１上）

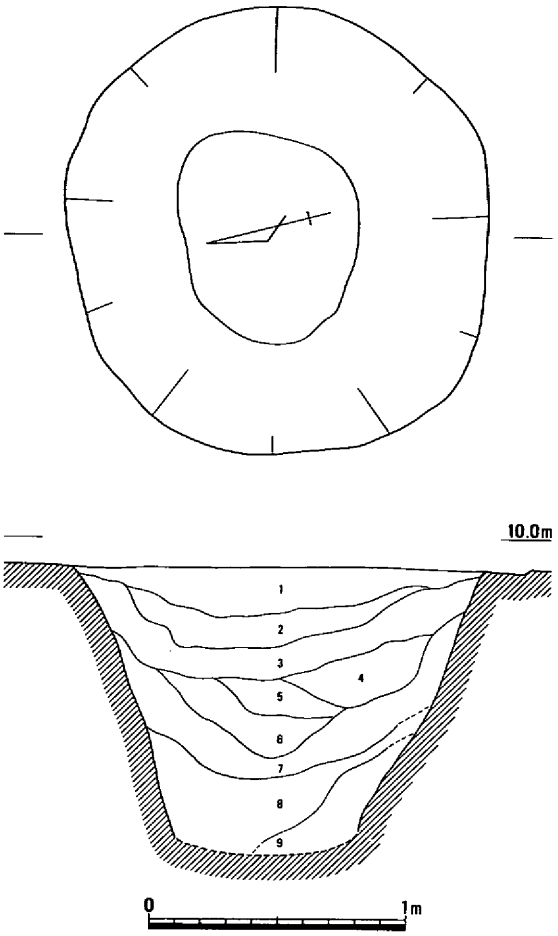
井戸１は調査区の中央部、建物６の北に位置する。検出状況では１・２・３層が輪切り状に見えていた。土層のうち３層は井戸としての機能が停止した後の埋土、２層はさらに意図的に埋められた土、１層は上層からの流れこみと考えられる。土器は３層中に多く見られた。出土状況は、台付鉢**13**は礫と一緒に上層にあり、礫の下に短頸壺**10**や他の土器が一緒にあった。**10**・**12**はいずれも完形に近いものが破片になって検出された。**13**は１つだけ完形を保っていた。掘り方の底面は砂層ではないが、湧水はあるので井戸として機能していたと考えられる。規模は掘り方が検出面で97cmの円形、深さは検出面から94cmで底面の海抜高は8.9ｍである。遺物については**10**と**12**で時期が判断できる。**10**は焼成が甘く灰白色で、口径は17.3cm、器高30.1cm、底径は7.7cmを測る。**12**は灰白色の色調で口径17.6cmを測る。短脚が著しく口縁部も直立している。それぞれの特徴は弥生時代後期末葉を表していると考えられるため、井戸の埋没時期も同じ頃と考えられる。



１.暗灰褐色粘質土　土器含む
２.黄白色粘質土　しまり強い　マンガン少量、土器わずかに含む
３.黒灰褐色粘質～粘土　下層はほとんど粘土　２～３cm大の地山ブロックを少量、５～10cm大の礫、土器を含む

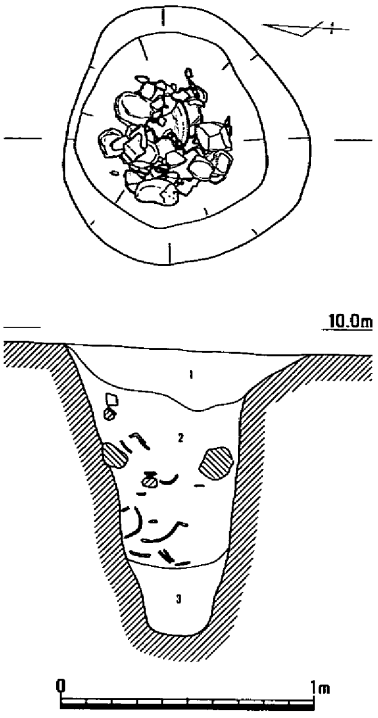


第18図　井戸１(1/30)・出土遺物(1/4)



1.淡灰褐色砂質土（堅くしまる）
2.黒褐色粘質土（土器、木炭含む）
3.灰褐色粘質土（土器、木炭含む）
4.茶灰褐色砂質土
5.淡茶灰褐色粘質土
6.暗灰色粘質土（若干褐色を帯びる）
7.淡灰色粘質土（地山ブロック多く含む）
8.淡緑灰色粘土（粘質非常に強い）
9.淡黄褐色粘質土

第19図　井戸２(1/30)



1.暗褐色粘質土（土器、黄色土ブロック含む）
2.黒褐色粘質土（土器、木炭、礫含む）
3.灰色粘質土（グライ化）

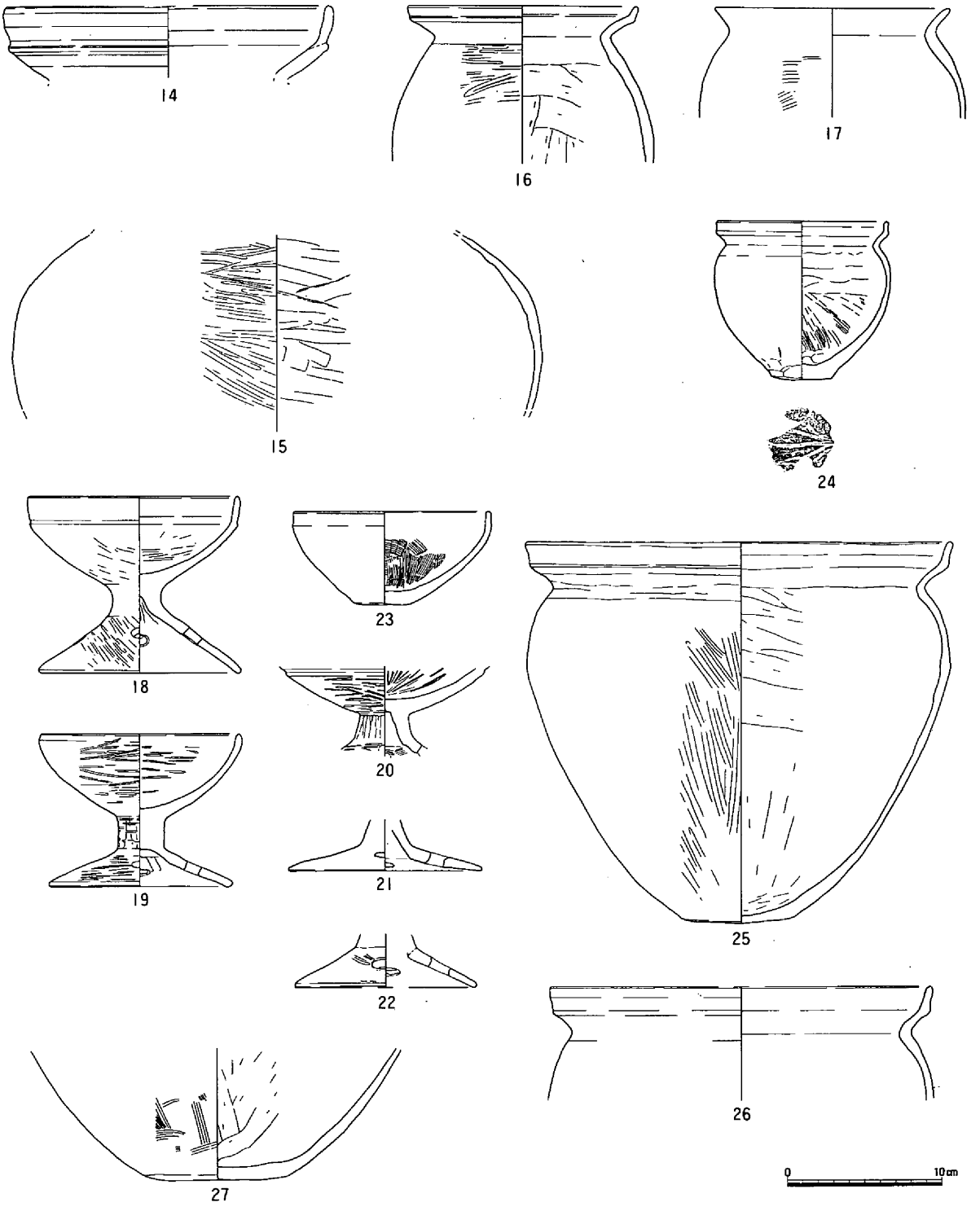
第20図　井戸３(1/30)

井戸２（第19図）

調査区の中央、井戸１の東に位置する。全体の遺構が乗る基盤層である黄白色粘質土の下層の暗灰色粘土層まで掘りこまれる。湧水は少なかったが井戸と判断した。掘り方は検出面で1.6～1.8mの東西に長いだ円形で深さは検出面から1.15mを測る。底面の海抜高は8.75mである。土器は上層（２層）までに含まれ、下層の方には認められなかった。出土した土器の量も少なく、図示できない。遺構の時期に関しては、遺物からでは判断できないが弥生時代後期より古い可能性がある。

井戸３（第20・21図）

井戸３は調査区の北東、4-Aグリッド杭の北に位置する。土層は３層に分かれ、２層には礫と共に土器が多く見られた。掘り方は検出面で103×98cmのだ円形、深さは検出面から115cm、底面の海抜高は8.7mである。底面はやはり粘質土で砂層ではなかったが、湧水があり井戸の機能は果たしていたも

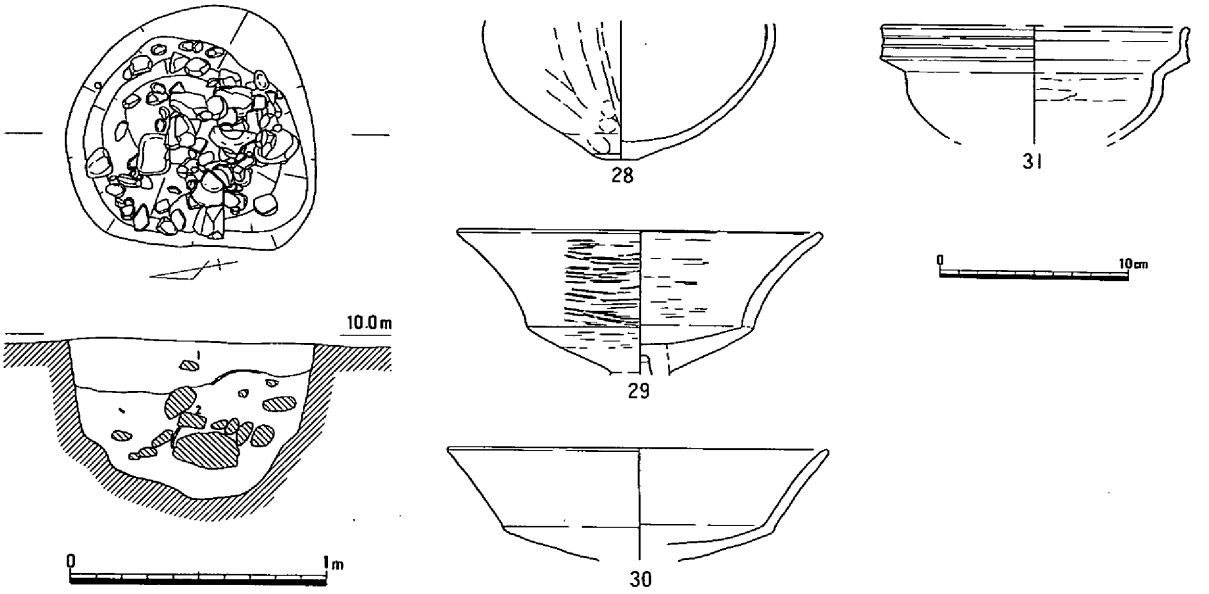


第21図　井戸３出土遺物(1/4)

のと思われる。遺物の特徴としては壺・甕・鉢において緩い折り曲げの２重口縁が共通して見られることである（**14・16・25**）。**14**は口径11cmを測り、色調は褐灰色を呈する。**16**は口径14.8cmを測り、色調は灰黄色である。また素縁小形鉢**23**は口縁の屈曲が見られ、底面もしっかりしている。これらの土器は弥生時代後期末葉に位置づけられ、この井戸は土器と共に埋没したと考えられる。

土壙４（第22図）

調査区北側、建物１の南東に位置する土壙である。湧水は多かったが土壙と判断した。掘り方は最大直径96cmのだ円形で、深さは62cm、底面の海抜高は9.85mである。下ばは東側が１段掘り窪められた形態である。土層の２層中から５～30cm大の礫に混ざって土器が出土した。土器は壺あるいは甕の底部と高杯・鉢の口縁部が出土した。**30**の高杯は橙色を呈し、口径は19.7cmを測る。時期は出土した土器から弥生時代後期末葉と考えられる。



１.暗灰褐色砂質土（土器、木炭含む）
２.暗灰色粘質土（土器、多量の礫含む）

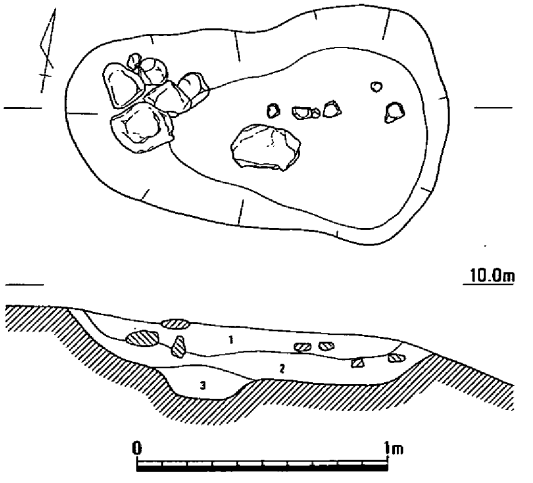
第22図　土壙４(1/30)・出土遺物(1/4)

土壙５（第23図）

調査区の北側、建物２の東に位置する。溝３の西肩に掛かる部分で検出された。掘り方は150×95cmのだ円形で、深さは検出面から最大30cm、底面海抜高は9.55mを測る。土器は小片が出土した。時期は不明である。

柱穴１（第24図）

調査区北側、建物１の南西に位置する。規模は検出面で55×45cmのだ円形、検出面からの深さは10cmで底面海抜高は9.8mを測る。25cm大の礫の上に高杯、甕が折り重なって出土した。いずれも完形品に近い。**32**は短脚で口縁部が直立気味である。時期は弥生時代後期末葉であると考えられる。



１.暗灰褐色砂質土（礫まじり）
２.暗灰色砂質土
３.暗茶褐色砂質土（堅くしまる）

第23図　土壙５(1/30)

柱穴２（第25図）

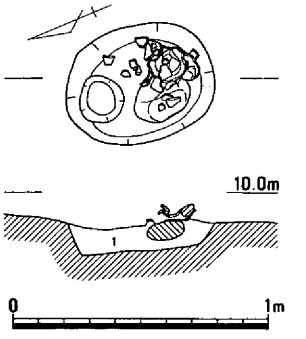
調査区の南東、河道２の北肩部に接して位置する。規模は検出面で直径60cmの円形で、検出面からの深さ55cm、底面は直径30cmの円形で底面の海抜高は9.05mを測る。土層断面図で示すように４層上面には20cm大の平たい礫が置かれ、底面付近には土器片が見られた。土器はいずれも完形ではない。２重口縁甕**35**は灰黄色を呈し口径12.7cmを測る。**37**は井戸３、土壙９に同じ形態のものがある。時期は弥生時代後期末葉～古墳時代前半前葉と考えられる。

溝２（第５・26図、写真図版１中）

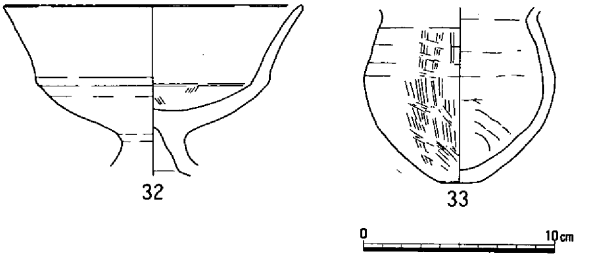
調査区の北端に位置し、おそらく東から西へ流れる溝である。掘り方断面は溝６のような逆台形ではなく、不整形な椀形を呈する。検出面での幅は最大155cmから最小60cmとばらつきがある。深さは最大で30cmで、底面の海抜高は9.6～9.7mである。遺物は小片で、時期は弥生時代後期末葉から古墳時代前半前葉と考えられる。

溝３（第５・27～30図、写真図版１下）

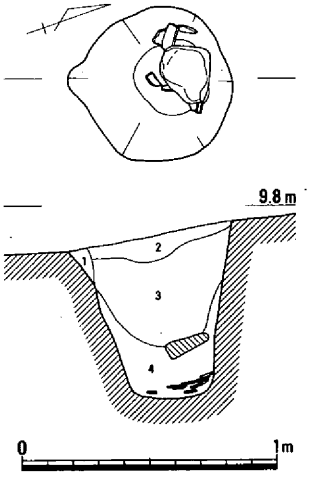
調査区を北から南西に横切る溝である。流路は蛇行していて、河道１が埋没した後その上を流れていた自然流路に近いものと考えられる。掘り方断面は不整形な椀形で、所によって形状は異なる。幅は検出面で115～335cm、底面の海抜高は北側で9.8m、西端は9.5m、断面ラインＥ-Ｆ付近が最も深く9.3mである。遺物はほとんどが土器で、耕作土直下で検出した。遺物は礫と共にいくつかの溜まり部を



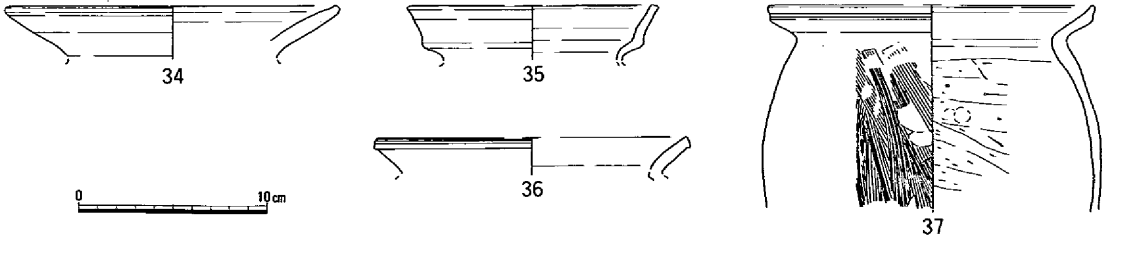
１.暗灰色粘質土



第24図　柱穴１(1/30)・出土遺物(1/4)



１.茶褐色粘質土
２.暗茶褐色粘質土
３.黒褐色粘質土
４.暗灰色粘土



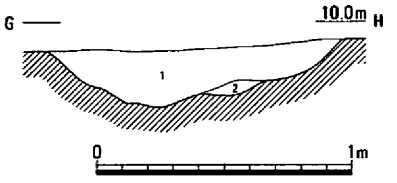
第25図　柱穴２(1/30)・出土遺物(1/4)

作っていてほとんどは土層の１層上面にあった。溜まり部は４ヶ所確認されたが削平が激しく土器の残りはよくなかった。

土器については各器種がそろっているが、時期については多少の幅があるものと考えられる。以下、特徴を述べて詳細に見ていくこととする。

壺（第28図）　**38**は破片より図上復元したものである。**39**は胴部が細長い。２重口縁(**40**～**45**・**47**)のものはいずれも短頸壺である。**42**は風化で不明瞭であるが口縁内面に鋸歯文を施す。**45**は西部瀬戸内地域など他地域からの搬入品である可能性もある。**46**は最も新しいと考えられる。

甕（第29図）　２重口縁のものでは口縁外面が櫛書沈線**48**・**50**～**52**と凹線**56**、ヨコナデ**57**・**58**がある。それらの全体の器形としては、胴部最大径は肩部からやや下がった位置で底部はまだ平底である(**48**・**49**)。素縁のものでは**59**は縦ハケメ上を横のヘラミガキを施すものである。**60**～**62**は外面にタタキメを残す傾向のものである。

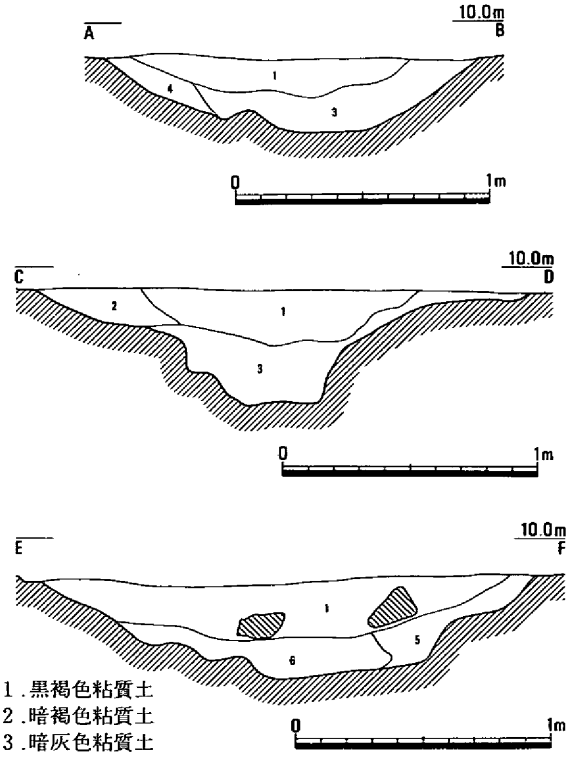


1.暗褐色粘質土
2.暗灰褐色砂質土

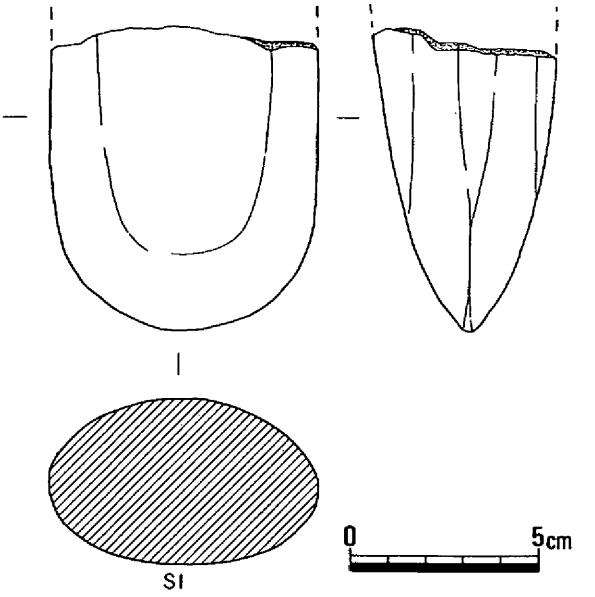
第26図　溝２断面(1/30)

高杯・その他（第30図）　高杯では短脚がやや長くなる傾向がうかがえる(**71**など)。口縁が外反するものでは直立する**65**・**66**と開き気味の**63**・**64**とがある。椀形の**69**では口縁と杯部の陵がある。また**73**・**76**は胎土が明らかに水漉し粘土であるが、その他でも精選された胎土を使用している。その他では鉢**80**・**81**、台付鉢**82**、手づくねミニチュア土器**83**・**84**、鼓形器台**85**、弥生時代中期の混入**86**がある。

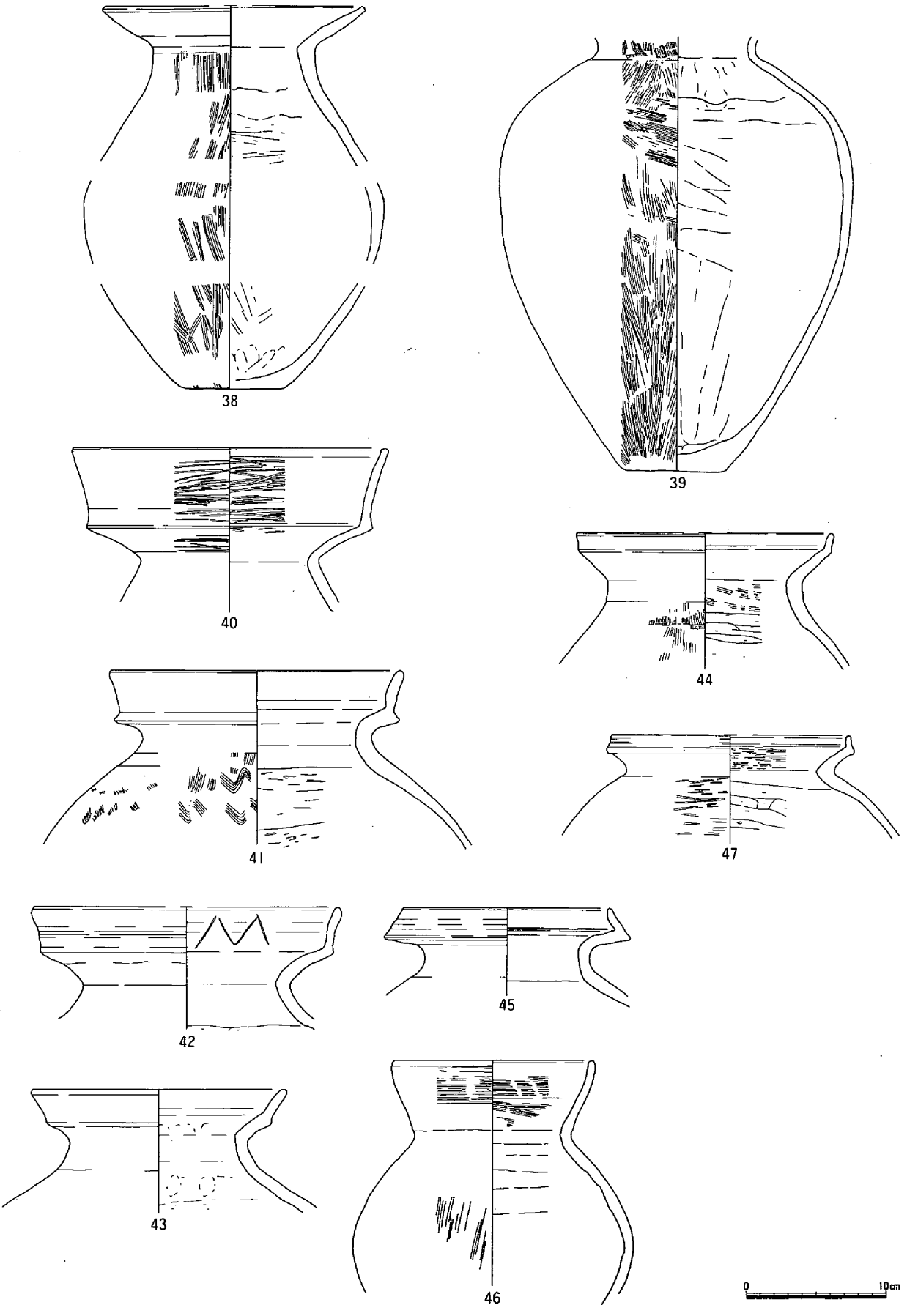
全体的には、２重口縁甕における口縁外部の沈線の変化(ヘラ書きから櫛書きへ)、高杯の脚部の長さ（短脚から長脚）及び口縁の傾斜（直立から外反が進行）より、溝６の土器群よりやや古めかほぼ同じ傾向を示すものと考える。時期としては弥生時代後期末葉といえよう。



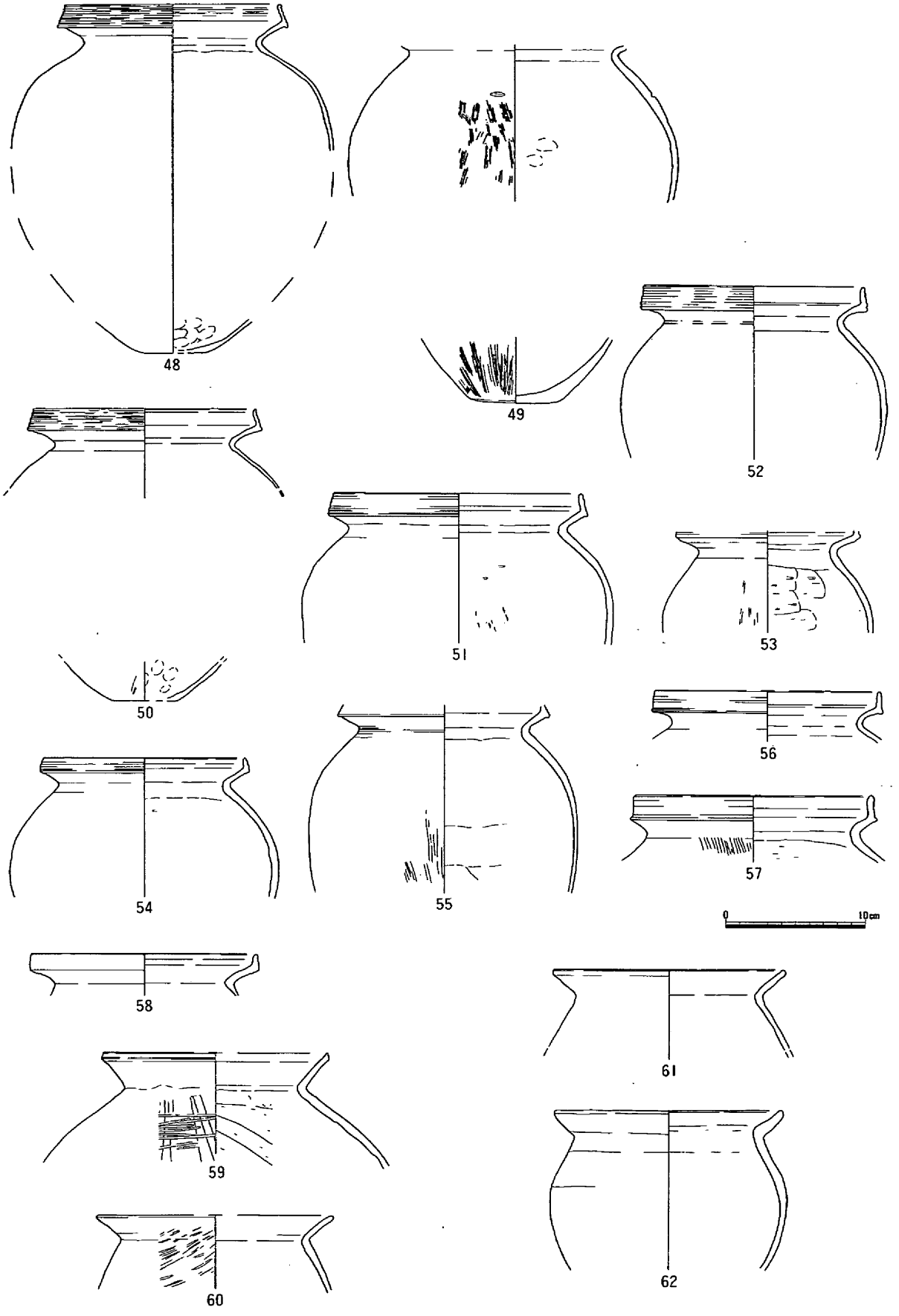
1.黒褐色粘質土
2.暗褐色粘質土
3.暗灰色粘質土
4.黄褐色粘質土
5.灰褐色砂質土
6.暗灰褐色粘土



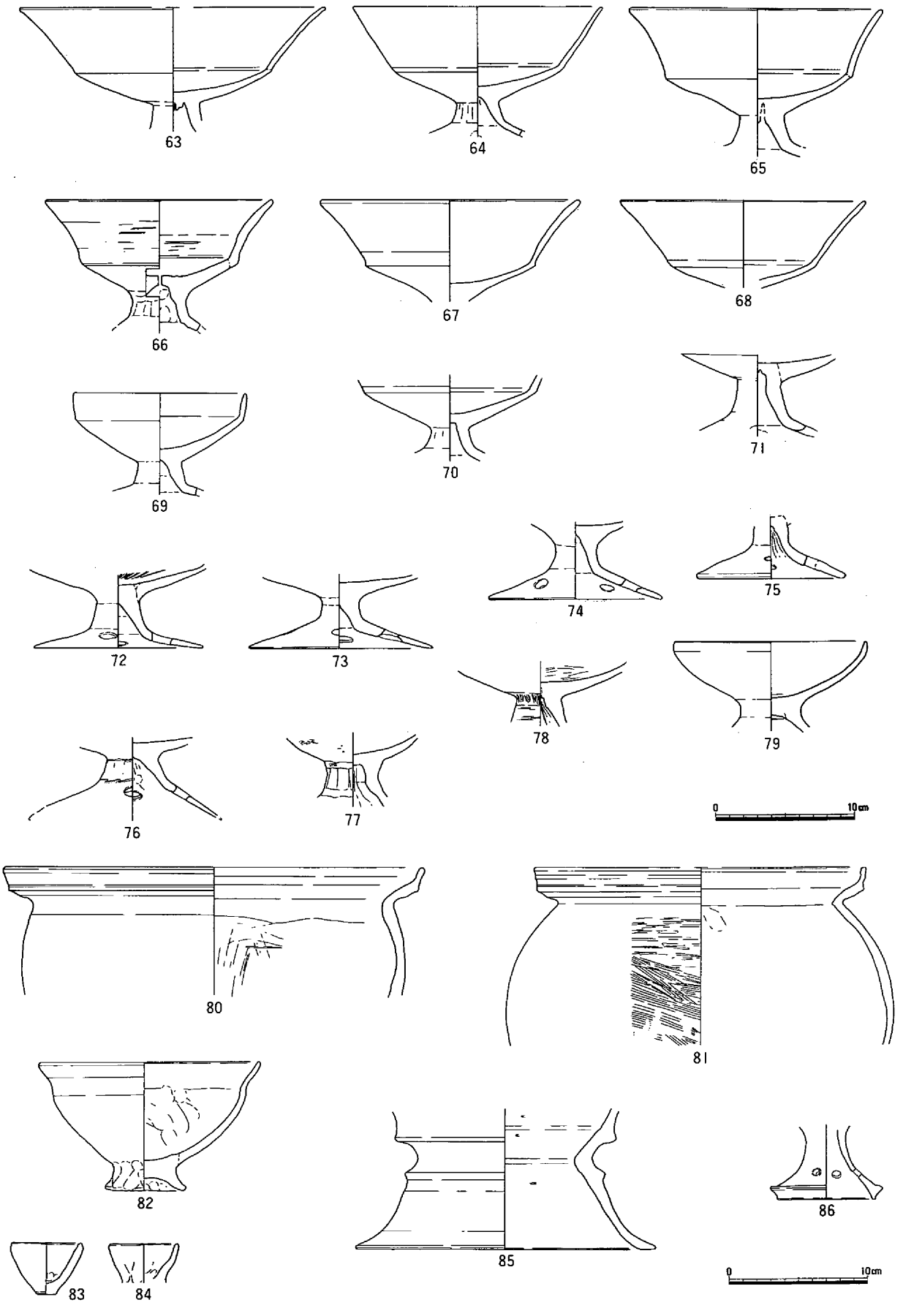
第27図　溝３断面１、２、３(1/40)・出土遺物１(1/2)



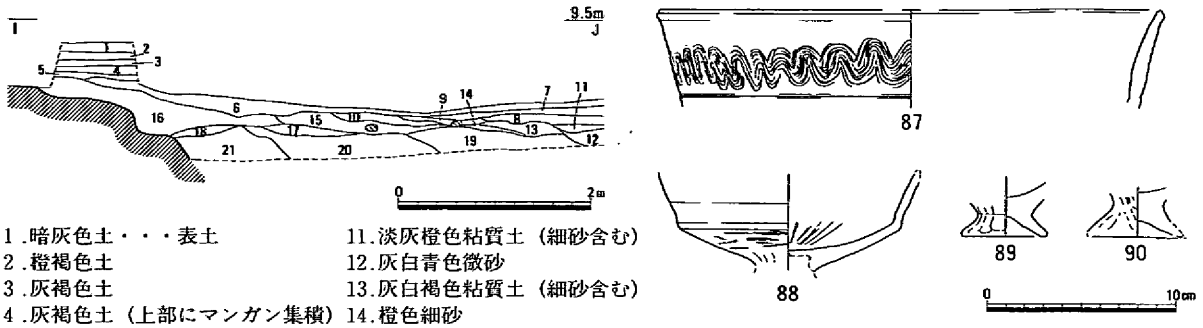
第28図　溝３出土遺物２（1/4）



第29図　溝３出土遺物３(1/4)

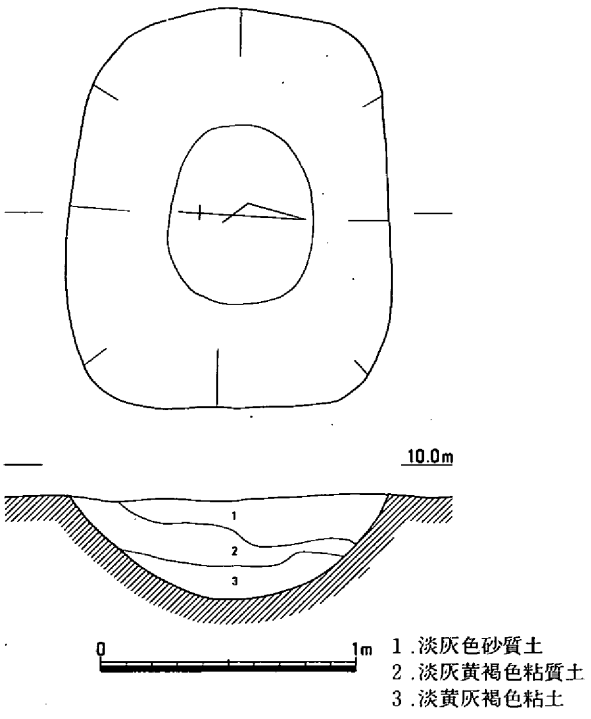


第30図　溝３出土遺物４（1/4）



1.暗灰色土・・・表土
2.橙褐色土
3.灰褐色土
4.灰褐色土（上部にマンガン集積）
5.淡茶褐色粘質土（粗砂少量含む）
6.茶褐色粘～砂質土（細砂含む）
7.橙灰色細砂
8.灰茶色細砂
9.橙灰色粘質土（細砂含む）
10.灰黄橙色粘土
11.淡灰橙色粘質土（細砂含む）
12.灰白青色微砂
13.灰白褐色粘質土（細砂含む）
14.橙色細砂
15.暗灰褐色粘土
16.淡灰褐色粘質土（南側橙色混じる、細砂含む）
17.灰橙色粘質土（微砂含む）
18.橙灰色粘質土（微砂含む）
19.白灰青色粘土（微砂含む）
20.灰白褐色粘土（微砂含む）
21.灰白色粘土（微砂含む）

第31図　河道２断面(1/80)・出土遺物(1/4)



第32図　土壙６(1/30)

河道２（第５・31図）

河道２は調査区の南東隅を北東から南西に横切る自然河道である。国道53号線バイパス工事に伴う発掘調査では両肩が確認されている。本調査区では北側の端とその上の土器溜まりの一部を確認したにすぎない。

図示した土器は６層を中心として出土した。**88**の高杯は口縁が直立し、杯部内面は縦のヘラミガキが見られる。**89・90**は製塩土器の脚部である。これらの時期は弥生時代後期末葉であると考えられる。調査区の範囲でできるだけ掘り下げを行ったが６層より下層については遺物が見られなかった。しかし国道バイパスの調査では弥生時代中期にさかのぼる遺物が見られることから河道の埋没は弥生時代中期から始まり、後期末葉にはわずかに残った窪みに土器などを廃棄したと考えられる。

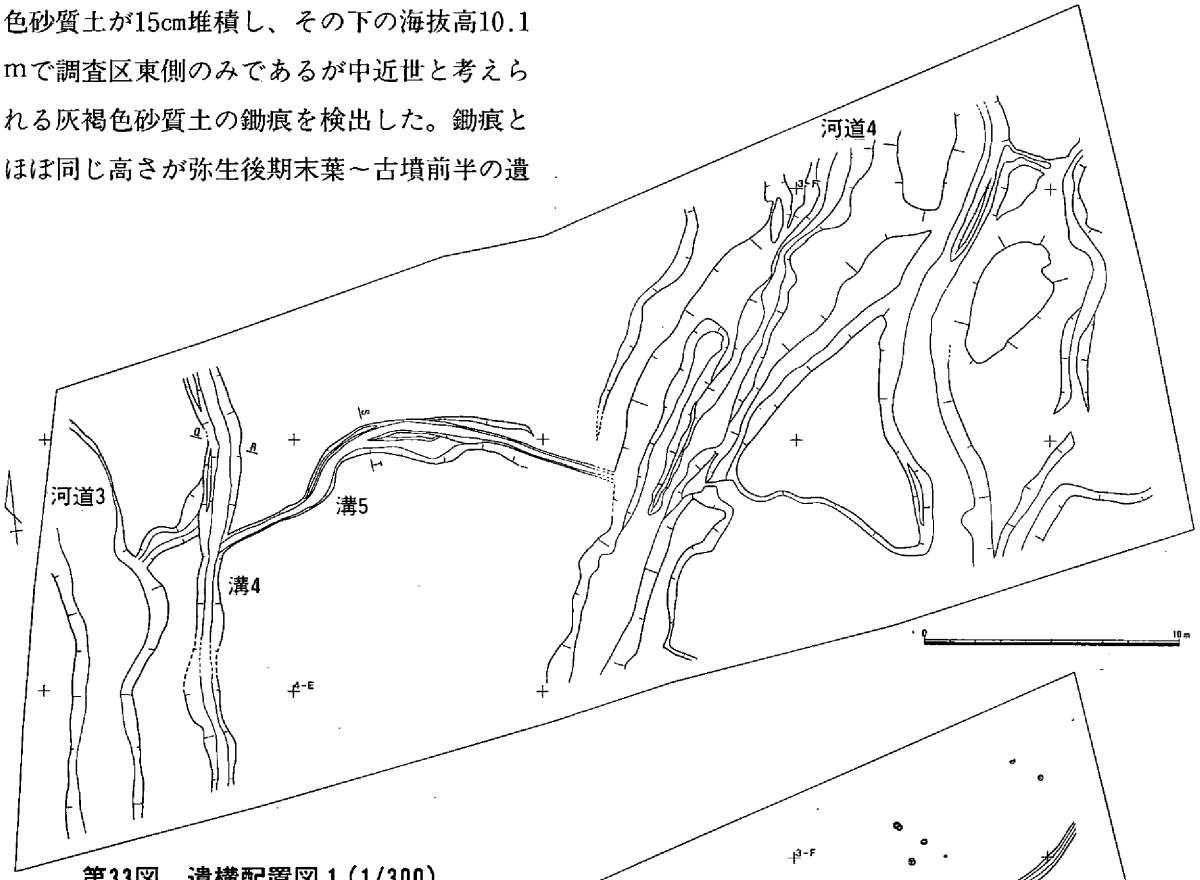
土壙６（第32図）

調査区東端で検出した。規模は検出面で東西1.6m、南北1.2mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さ40cm、底面の海抜高は9.45mを測る。埋土１層に備前焼片が含まれる。また埋土は弥生～古墳時代の遺構の黒っぽい土ではなく灰色っぽい砂質土であり、中～近世の遺構と考えられる。

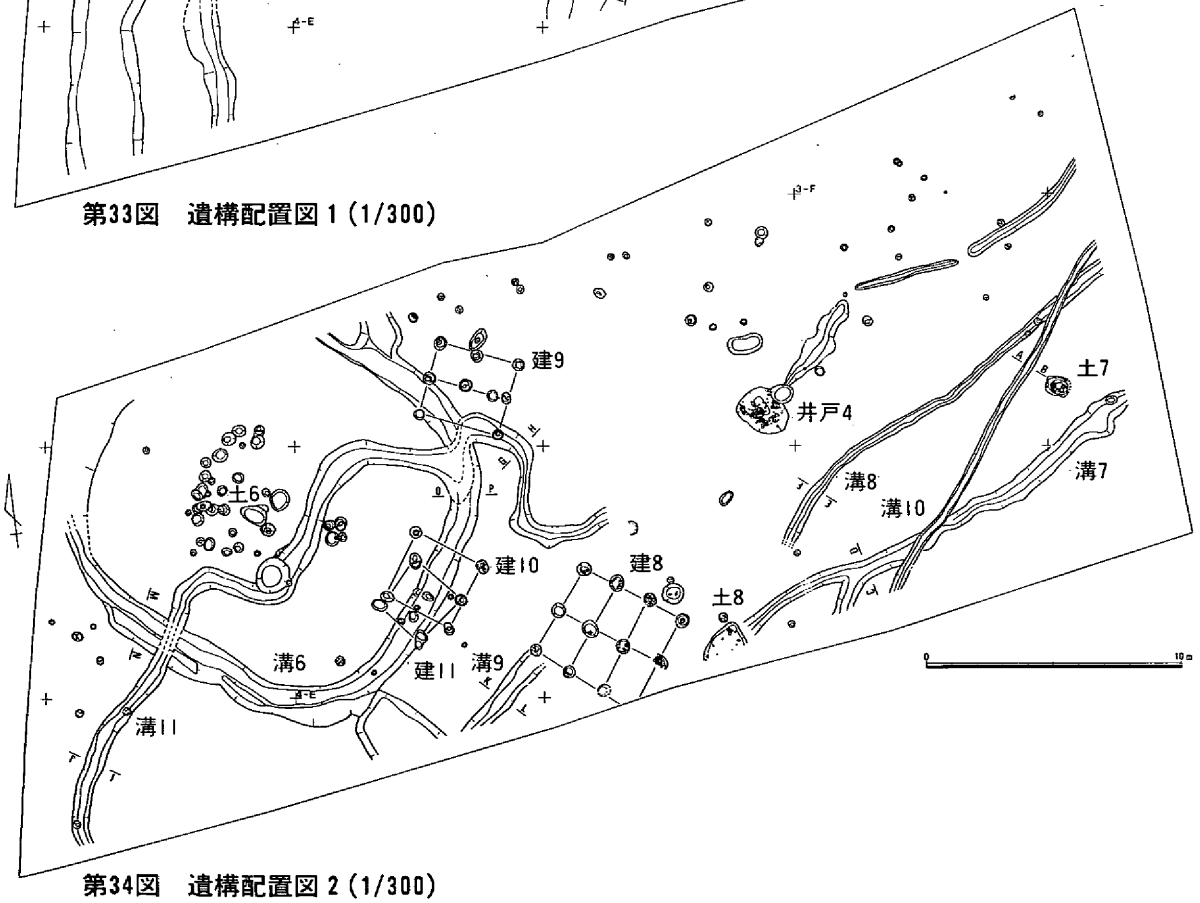
第２節　田益新田遺跡　宝仏調査区

（１）　調査区の概要

調査区は現地表から１ｍの深さの造成土が入り、その下に最近の水田層があった。水田層下は灰褐色砂質土が15cm堆積し、その下の海抜高10.1ｍで調査区東側のみであるが中近世と考えられる灰褐色砂質土の鋤痕を検出した。鋤痕とほぼ同じ高さが弥生後期末葉～古墳前半の遺



第33図　遺構配置図１（1/300）

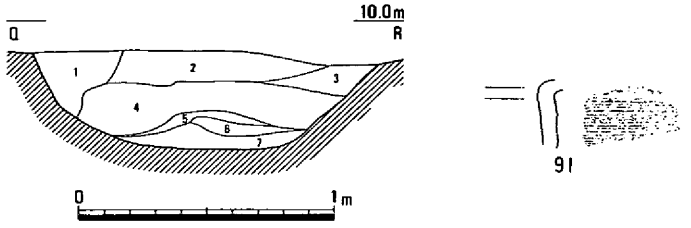


第34図　遺構配置図２（1/300）

構面である。この時期の遺構面は砂層で、遺構は砂質あるいは粘質土で埋まっていた。この遺構面の下を調査区東側では河道４が、西端では河道３が北西から南東へ流れる。河道及び河道の間は灰褐色粘質土が基盤層となっている。当調査区では灰褐色粘質土上の遺構は弥生時代中期の可能性が高い。

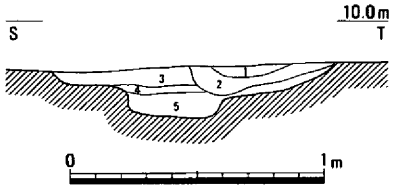
（２）　弥生時代前・中期の遺構・遺物

溝２条を確認した。溝４（第35図）は調査区の西端、河道３と並行して北から南へ流れる溝である。一部溝６によって切られる。溝６より北の底面海抜高は9.8m、南は9.5mを呈する。幅は80～150cm、深さは検出面から20～30cmを測る。遺物から時期は弥生中期前葉と考えられる。溝５（第36図）は調査区西側を東から西へ流れる溝である。２回以上の改修があるが、最上層の溝は検出が困難であった。底部の高低差から、河道４から溝４へ流れていたと考えられる。幅は30～180cm、深さは10～15cm、底面海抜高は9.5～9.7mを



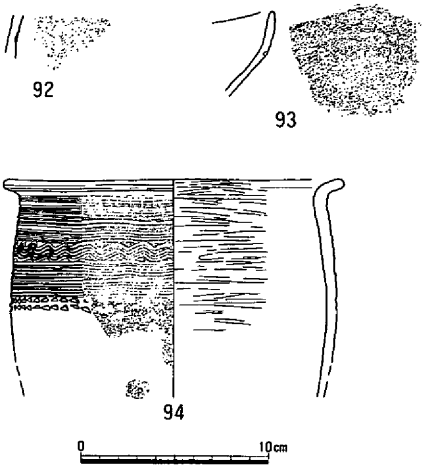
1.淡白黄褐色粘質土　マンガン多く含む
2.淡灰黄褐色粘質土　マンガン多く含む
3.淡白黄褐色粘質土　マンガン少し含む
4.灰色細～粗砂
5.茶灰褐色粘質土
6.明灰緑色砂質土
7.灰褐色細砂

第35図　溝４断面(1/30)・出土遺物(1/4)

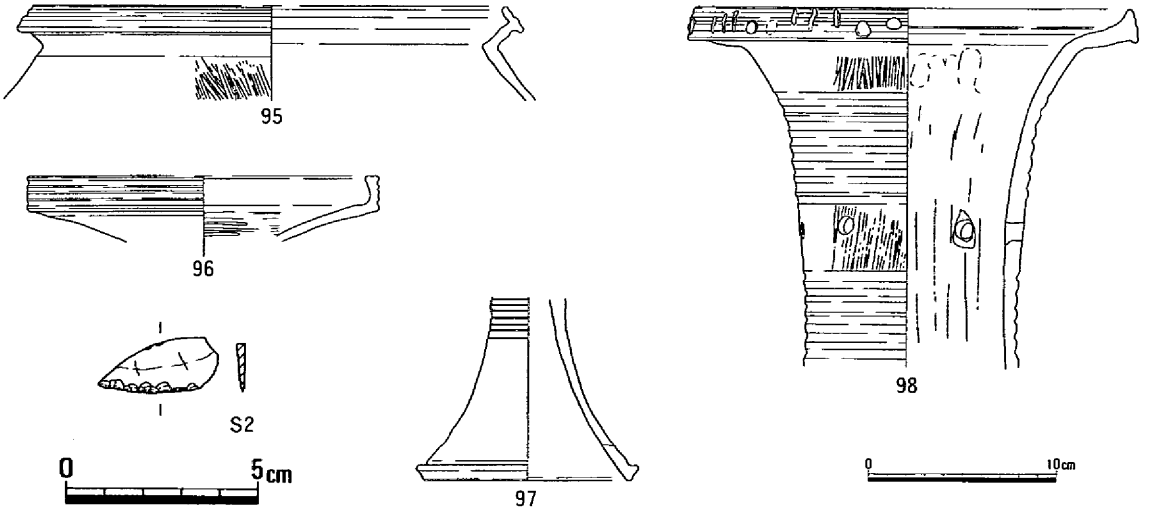


1.暗灰褐色粗砂
2.黄灰褐色細砂
3.灰褐色砂質土
4.淡黄灰褐色細砂
5.灰色細砂

第36図　溝５断面(1/30)



第37図　河道３出土遺物(1/4)



第38図　河道４出土遺物(1/4)・(1/2)

測る。遺物は検出されなかった。

また、調査区東側は弥生中期末の土器を含む河道４（第33・38図）が占める。北西から南東へ複雑な分岐を持つ流路で、底面の海抜高は9.4～9.6mを示す。西端は弥生中期前葉の土器を含む河道３（第33・37図）が北西から南東へ流れる。幅は検出面で１～1.6m、底面海抜高は9.2～9.4mである。

（３）　弥生時代後期から古墳時代前半の遺構・遺物

建物８（第39・40図、写真図版２上）

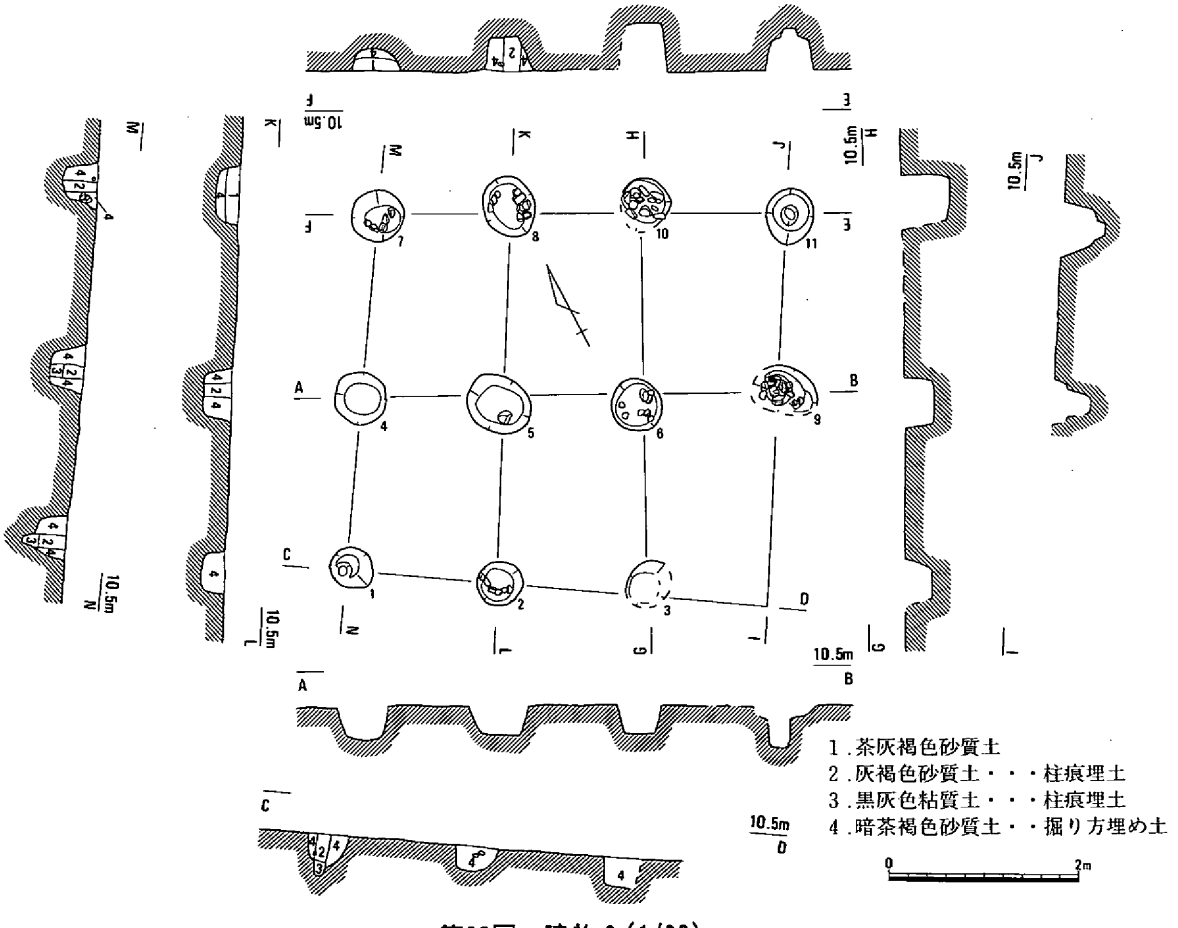
調査区の中央南端に位置する３×２間の掘立柱建物である。南端の柱穴は調査区外に位置すると考えられる。柱穴の規模は、検出面で直径が55～70cmの円・だ円形、深さは検出面から30～40cm、柱穴底海抜高は9.4～9.8mを示す。**99**はＰ8から出土した。この建物の時期は弥生時代後期と考えられる。

建物９（第40図）

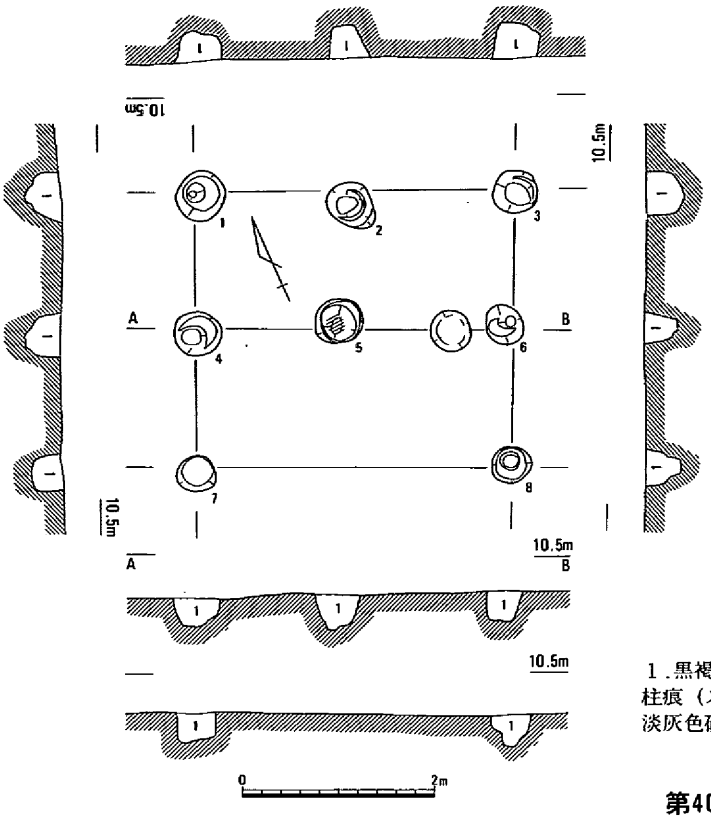
調査区中央北側に位置する２×２間？の掘立柱建物である。柱穴は検出面で直径40～50cmの円形で、深さは検出面から30～40cm、底面の海抜高は9.7mを測る。**100**はＰ6から出土した。この建物も建物８同様弥生時代後期の可能性が高い。

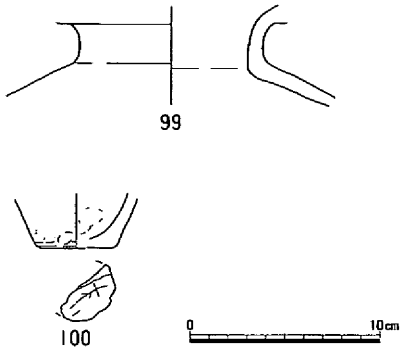
建物10（第41図）

調査区の西側にある１×１間の掘立柱建物である。柱間は2.8mほどで建物８・９より広い。柱穴は検出面で直径40～50cmの円またはだ円形で、深さは20～40cm、底面の海抜高は9.4～9.6mを示す。



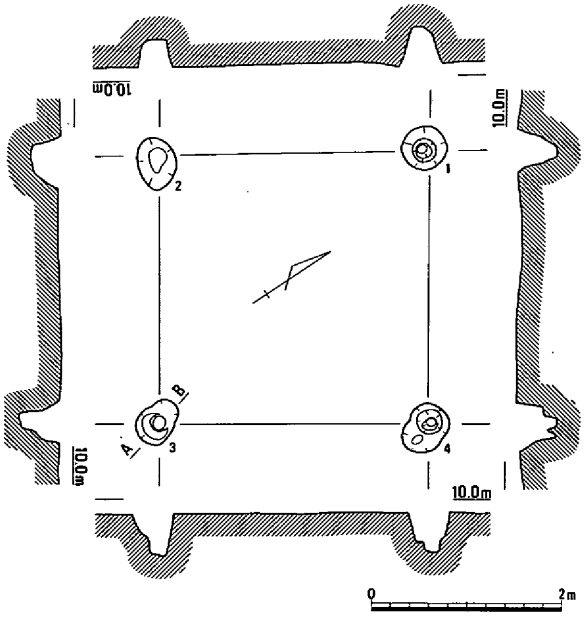
第39図　建物８（1/80）

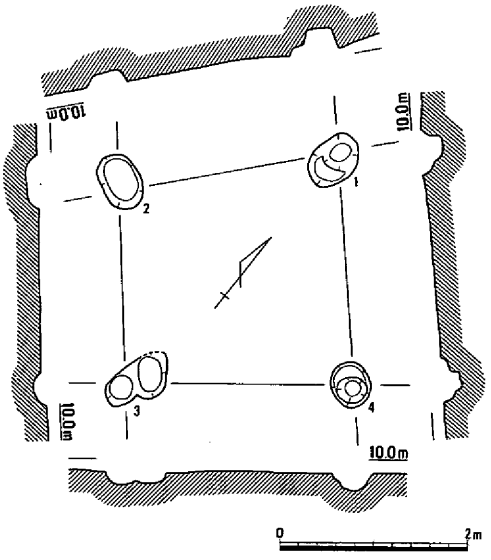




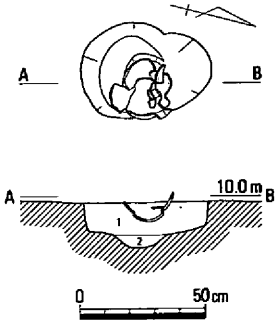
１.黒褐色粘質土
柱痕（スクリーントーンの部分）
淡灰色砂質土

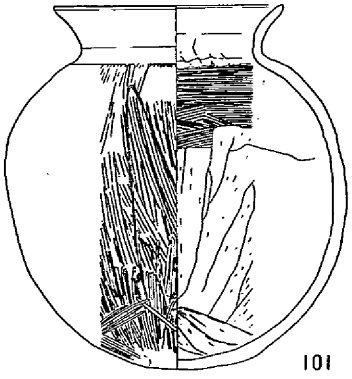
第40図　建物9(1/80)・建物8,9出土遺物(1/4)





第42図　建物11(1/80)





１.青灰褐色砂質土
２.暗茶褐色砂質土

第41図　建物10(1/80)・遺物出土状況(1/30)・出土遺物(1/4)

柱穴のうち、Ｐ3より完形の甕**101**が出土した。**101**は素縁で器壁が厚く、古墳時代前半後葉に当たると考えられる。

建物11（第42図）

調査区の西側で建物10と重複する１×１間の建物である。柱穴は径が50～60cmのだ円形、深さは10～20cmで底面海抜高は9.7mである。柱穴に切り合いがあり、建物10より古いと考えられる。

井戸４（第43・44図）

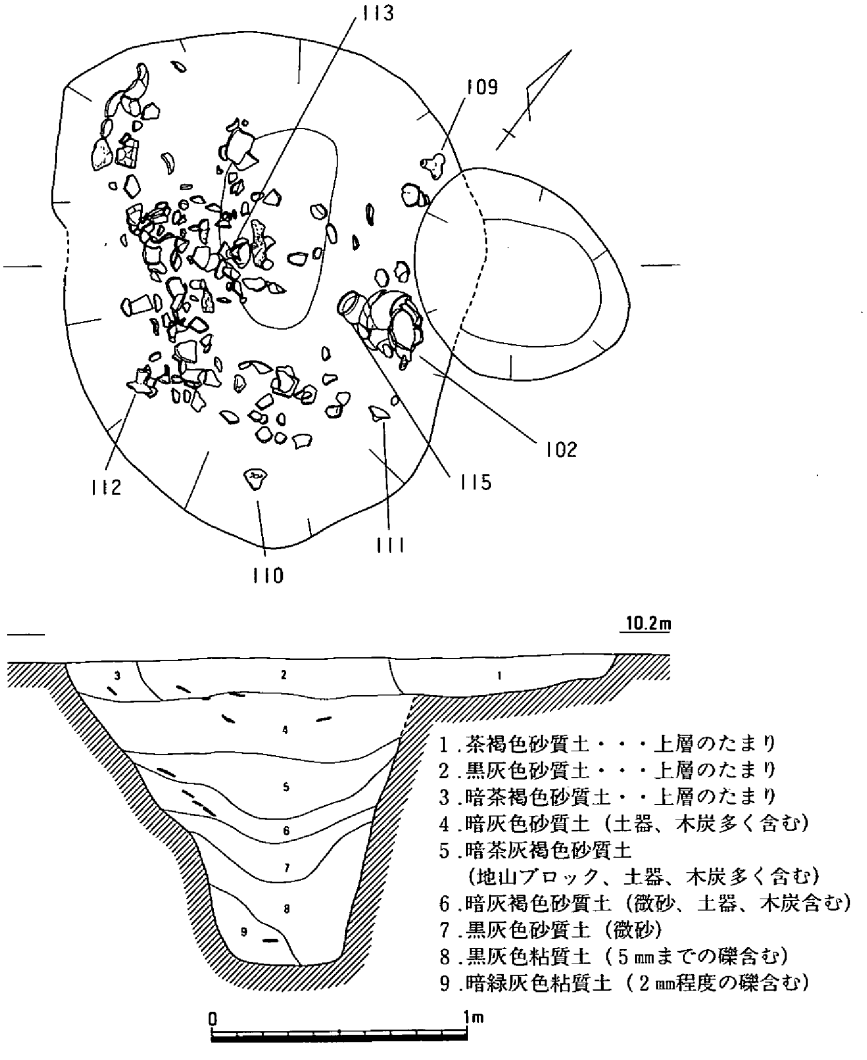
調査区中央やや東よりに位置する。掘り方は検出面で２×1.7mのだ円形で底面は0.8×0.4mのだ円形を呈する。深さは検出面から底面まで1.2mに達し、底面の海抜高は8.9mである。最下層はグライ化し、湧水が認められる。遺物出土状況は海抜高9.8～10mまでのものを示した。出土状況には示していないが、この高さまで掘り下げ中に**117・118・120**が確認されている。甕・高杯のほとんどはこの深さで出土した。**115**の甕、**122**の鉢はここに含まれる。その他の土器のうち、**114**は最下層の９層中から、**116**と**119**は５層から出土した。また、６～９層中に桃の種が多く確認できた。最下層の**114**と上層で土器の形態に差異は少ないと考えられることから、この井戸の時期は古墳時代前期前葉に位置づけられる。

土壙７（第45図）

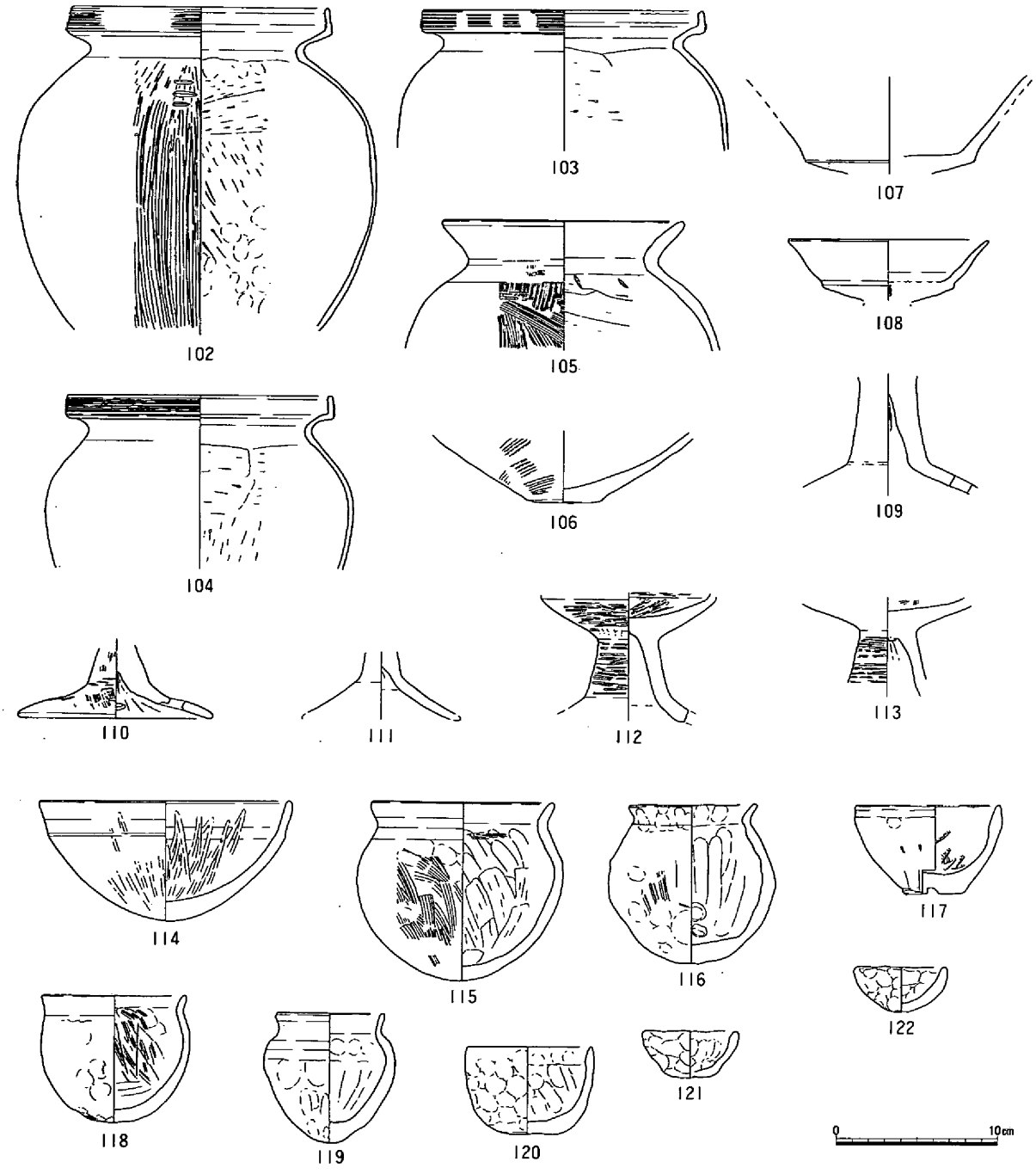
調査区の北西に位置する。掘り方は検出面で1.1×0.7mの不整なだ円形、断面でも底部が平らでなく凹凸が見られる。深さは検出面から20cm弱、底面の海抜高は9.8mを測る。遺物は製塩土器で、古墳時代前期前葉と考えられる。

土壙８（第46図、写真図版２中）

調査区の東端に位置する。掘り方は検出面で100×75cmの不整な方形を呈し、底面は直径30cmの円形である。深さは検出面から70cm、底面の海抜高は9.35mを測る。湧水があったが井戸かどうかは判断できなかった。遺物から時期は古墳時代前期前葉と考えられる。



第43図　井戸４（1/30）



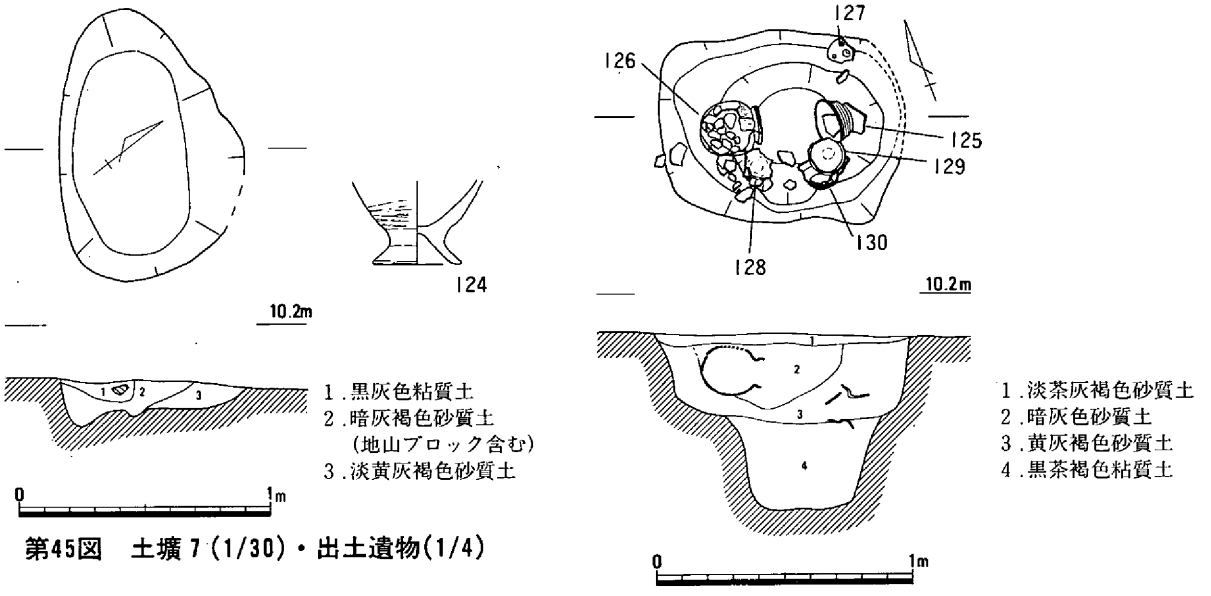
第44図　井戸４出土遺物(1/4)

土壙９（第47図）

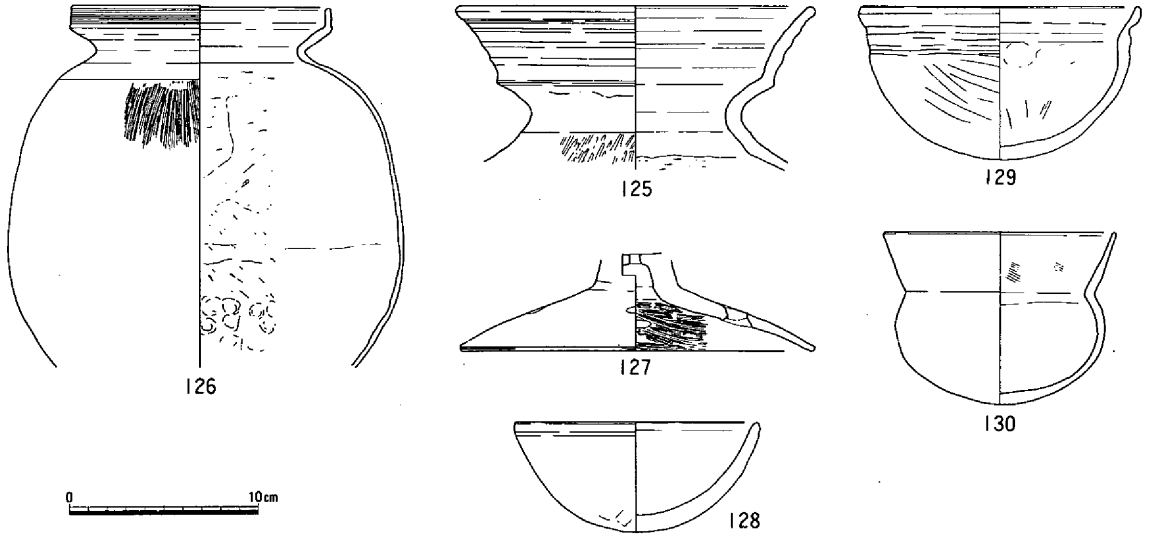
調査区の中央南端に位置する。南側は調査区外に当たり全体を確認できなかった。深さは検出面から15cm、底面の海抜高は9.9m弱である。遺物から、時期は弥生時代後期末葉であると考えられる。

溝６（第34・48～52図、写真図版２下）

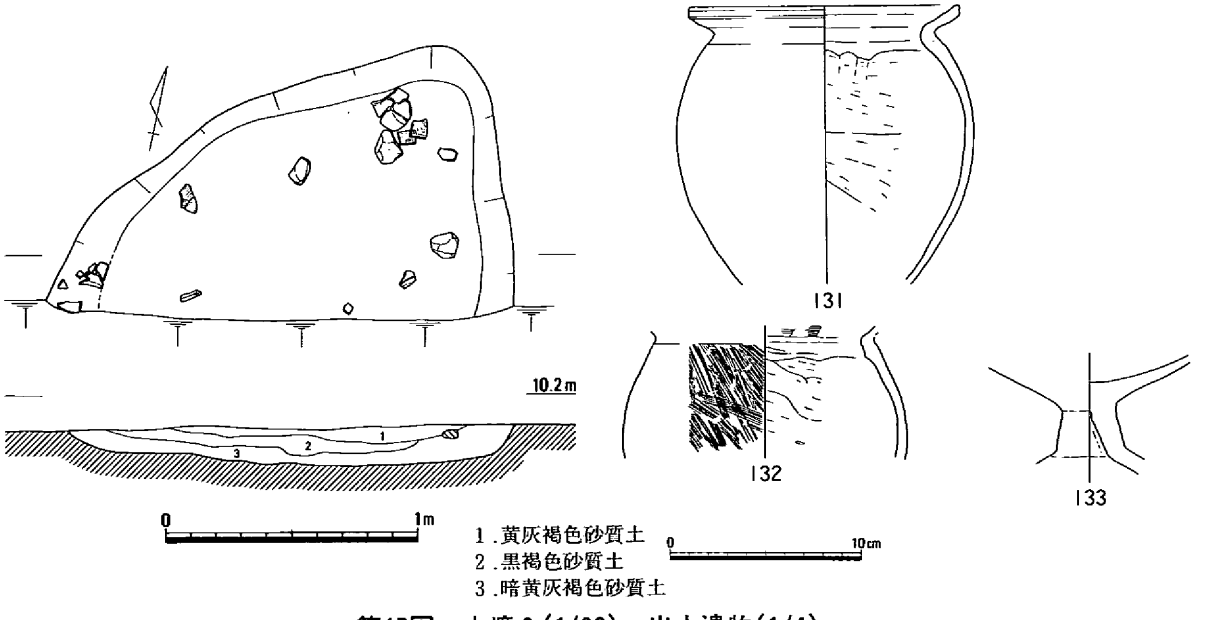
調査区西側に位置する。流路は12～13mの方形の空間を囲む形である。北西側では残りが悪く、掘り方上面のみ検出できた。土層は上層（１・２層）



第45図　土壙７(1/30)・出土遺物(1/4)

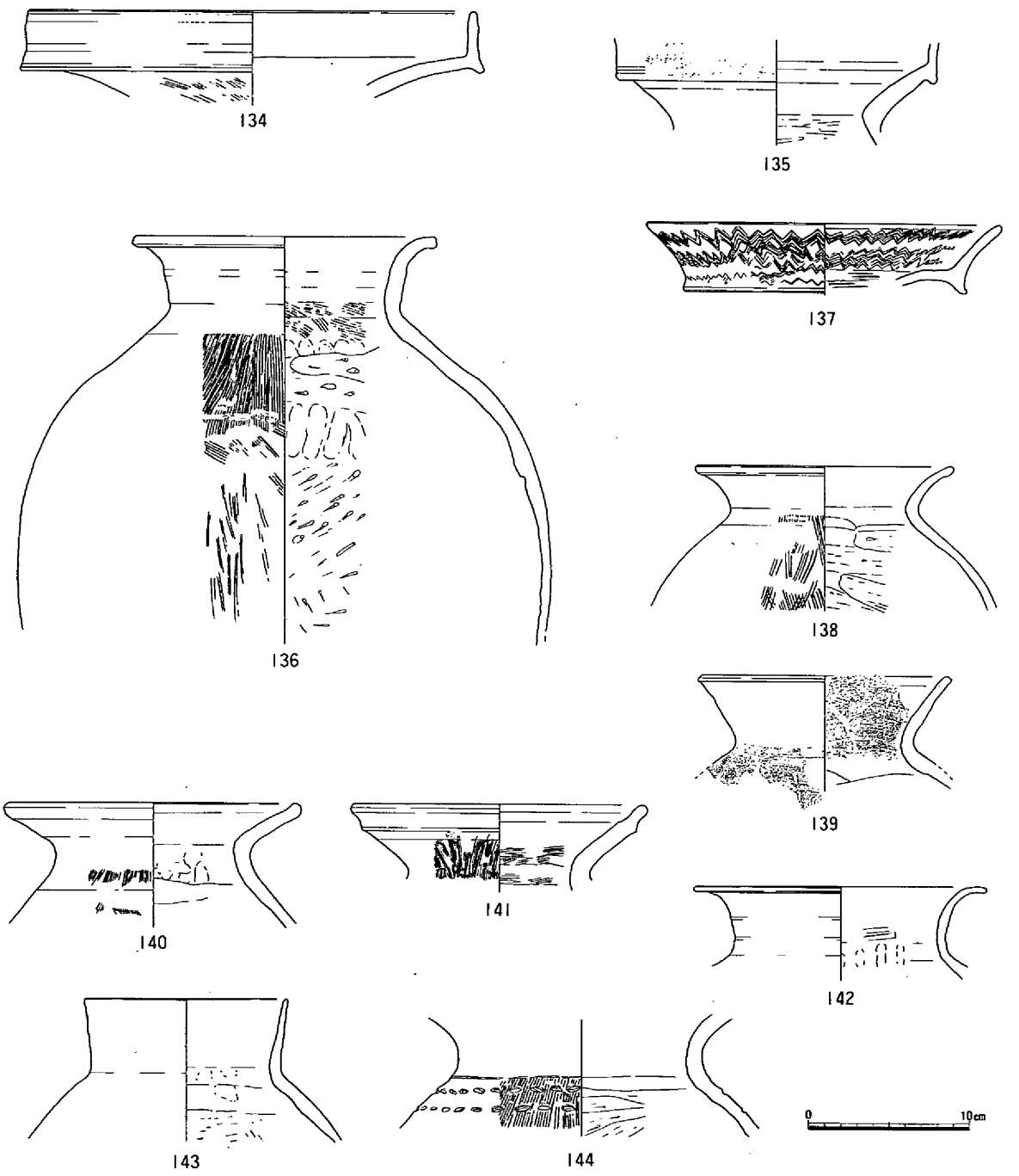


第46図　土壙８(1/30)・出土遺物(1/4)

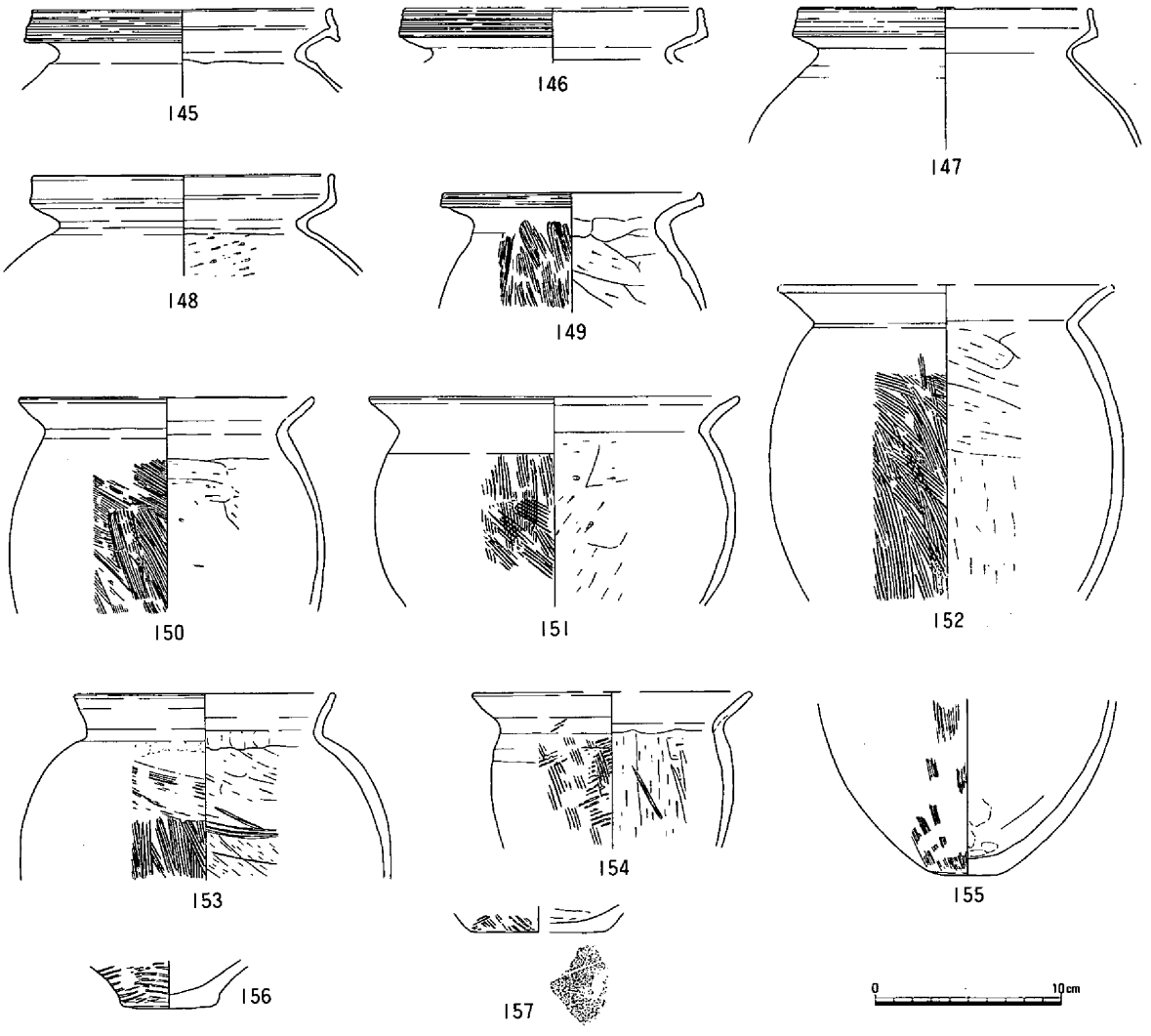


第47図　土壙９(1/30)・出土遺物(1/4)

が後世の落ちこみ、その下が本来の埋土で土器を多く含んでいた。溝の掘り方は断面が方形をなし、深さは検出面から10～70cm、幅は45～120cmである。底面海抜高は最も深い断面O－Pライン上で9.4m、浅い北西隅で9.8mを測り北西から南東へ下がる傾向にある。このことから溝６は南東部に水が溜まり、排水路の機能を果たさないと考えられる。溝からの排水は南隅にとりつく方形の窪みが果たしていたのであろう。遺物の特徴は次のようなものである。壺は２重口縁が少なく素縁のものが目立つ。甕の２重口縁のものでは口縁外面が櫛書沈線の**146**もあるが、主流はヨコナデかヘラ書き沈線である。高杯は脚が長脚傾向の**165**も見られる。鉢は端部の拡張度が低い２重口縁のものが主流である。また**183**は蓋である。土器のほとんどは弥生時代後期末葉と考えられる。



第48図　溝６出土遺物１(1/4)



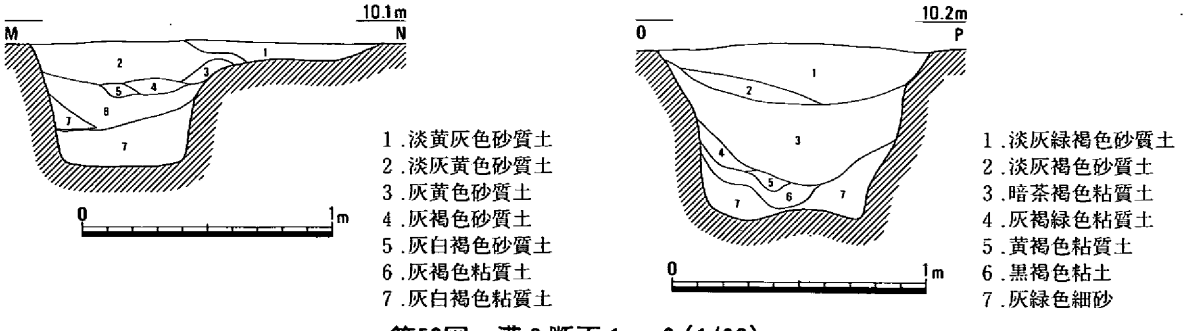
第49図　溝６出土遺物２(1/4)

溝７（第34・54図）

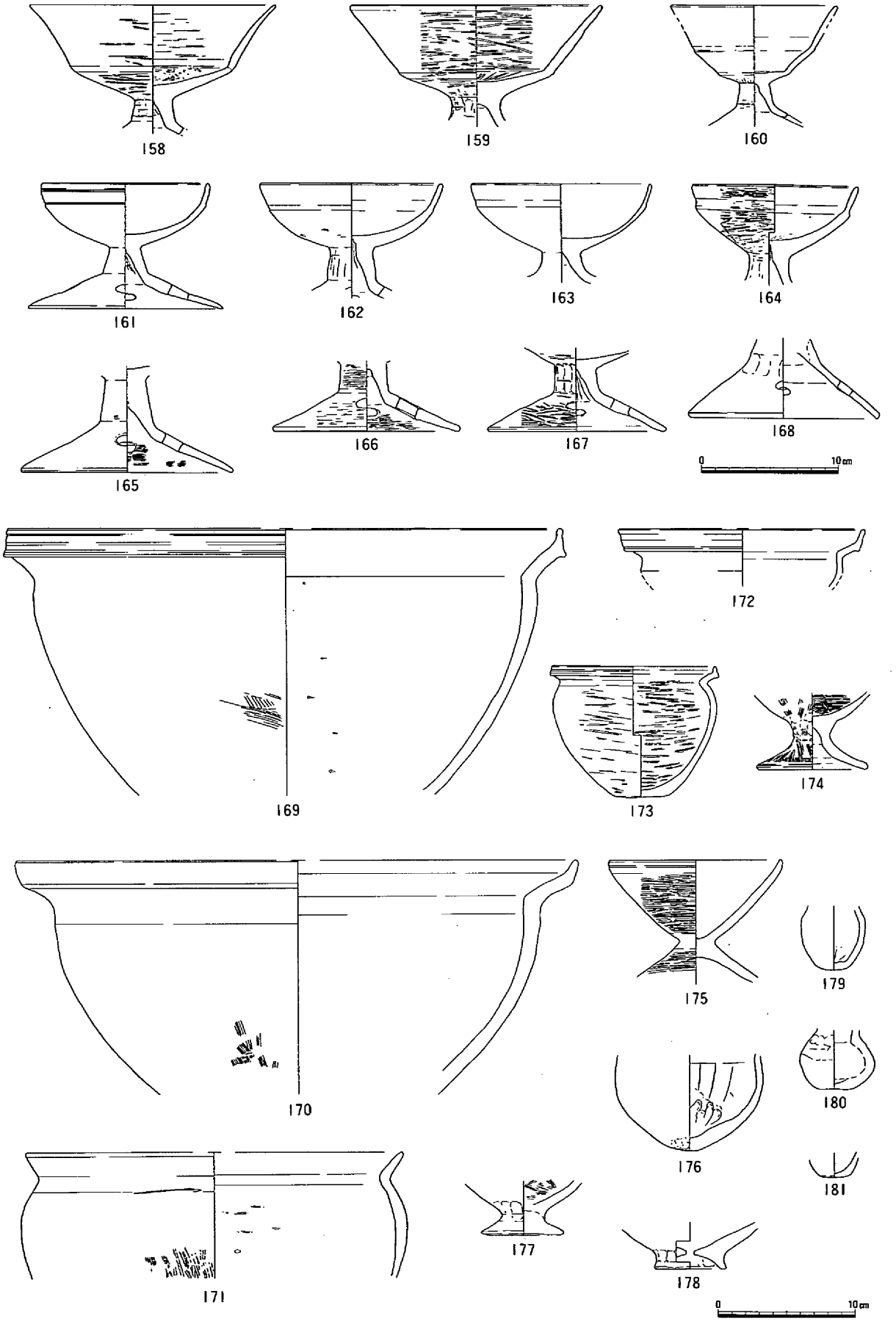
調査区の南東を流れ、溝10と土壙８に切られる。流路はおそらく東から西であろう。検出面で幅は45～80cm、深さは10～15cmで底面海抜高は9.9m前後である。**187**は高杯脚裾部内面の透し孔の回りに線刻を施したものである。この溝の時期は土器から弥生時代後期末葉に当たる。

溝８～11（第34・53・55～60図）

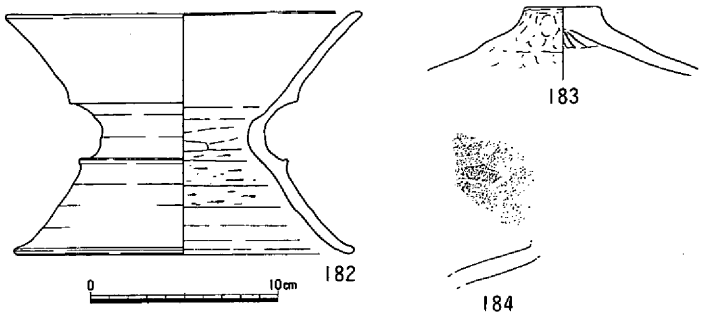
溝８は調査区の東側を流れ、溝10に切られる。幅は30～45cm、深さは10cm程度で底面の海抜高は9.9～10



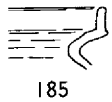
第50図　溝６断面１、２(1/30)



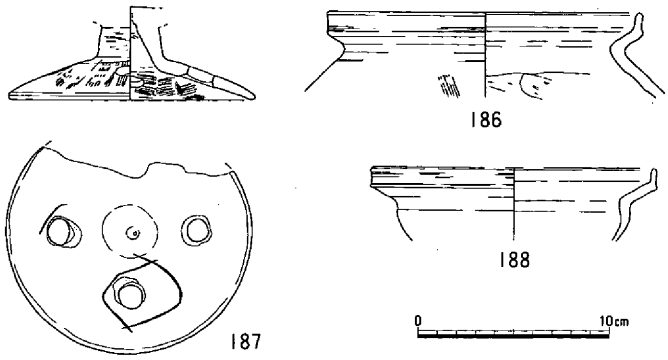
第51図　溝６出土遺物３（1/4）



第52図　溝６出土遺物４(1/4)

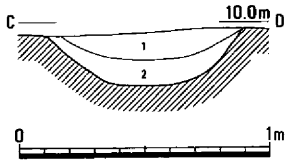


第53図　溝10出土遺物(1/4)



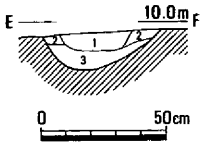
第54図　溝７出土遺物(1/4)

mを測る。溝９は調査区中央南端に位置し、流路方向は不明で幅80cm、深さ10cm弱である。溝10は調査区東側を流れ、流路方向は不明であるがこれもおそらく東から西へ流れるものと考えられる。幅は30～60cm、深さは10cm弱で底面海抜高は9.8mである。溝11は調査区西側では１本の溝として検出できたが東側では断片的にしかわからなかった。東側は井戸４の上を通ると考えられるものである。流路方向は不明である。幅は40～130cm、深さは10～20cm程度で底面海抜高は9.9mである。遺物は溝10で櫛書沈線の２重口縁を持つ甕片が確認され、時期は古墳時代前半前葉と考えられる。



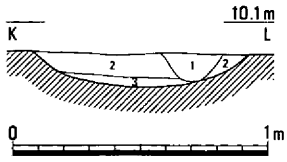
１.淡灰緑褐色砂質土
２.淡灰褐色砂質土

第55図　溝７断面(1/30)



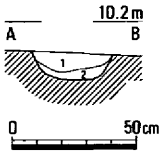
１.淡灰褐色粘質土
２.淡黄灰褐色粘質土
３.灰色細砂

第56図　溝８断面(1/30)



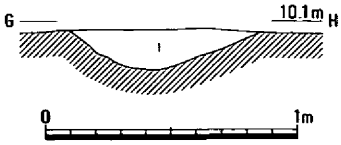
１.淡灰黄色砂質土
２.淡灰色砂質土
３.灰色細砂

第57図　溝９断面(1/30)



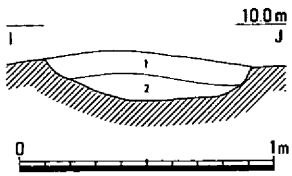
１.暗灰色砂質土
２.黄灰褐色砂質土

第58図　溝10断面(1/30)



１.黒褐色粘質土

第59図　溝11断面１(1/30)

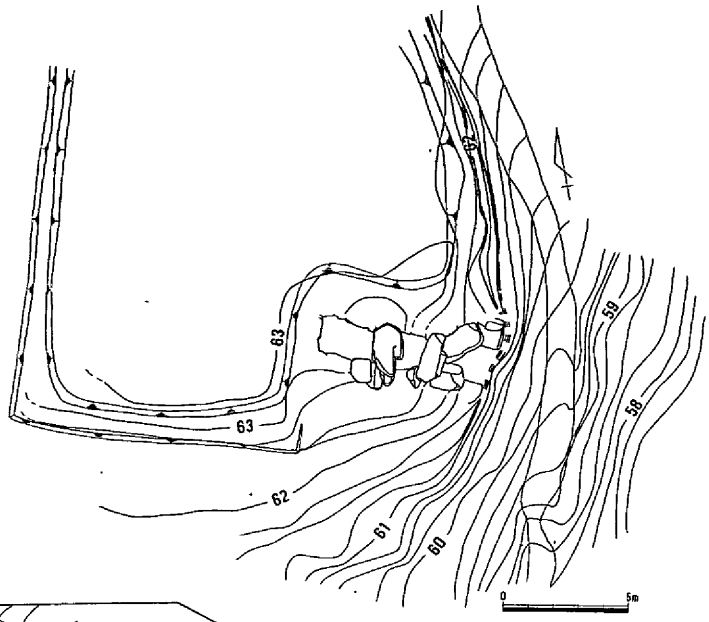


１.淡灰褐色粘質土
２.黄褐色粘質土

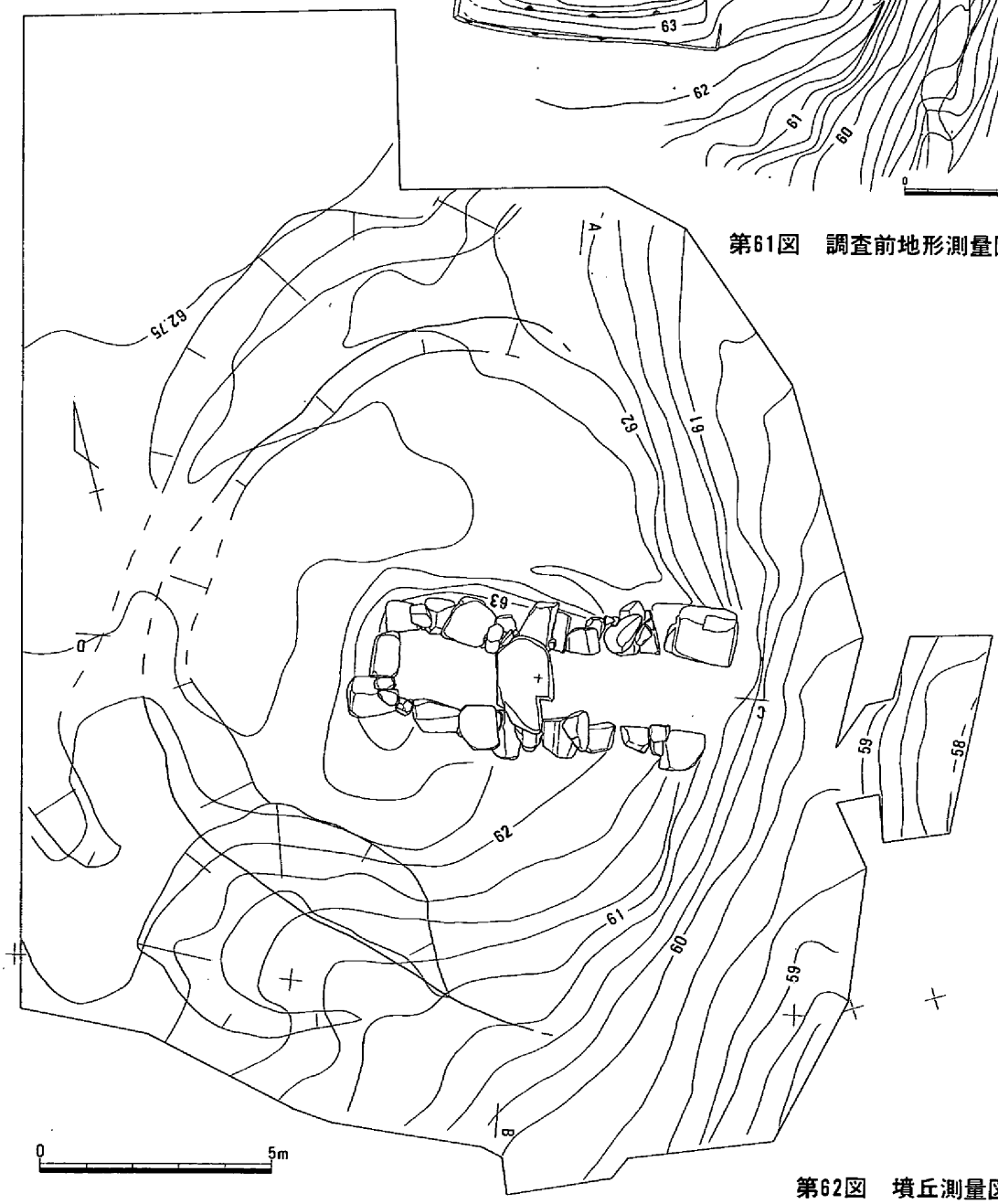
第60図　溝11断面２(1/30)

第3節　青谷５号墳

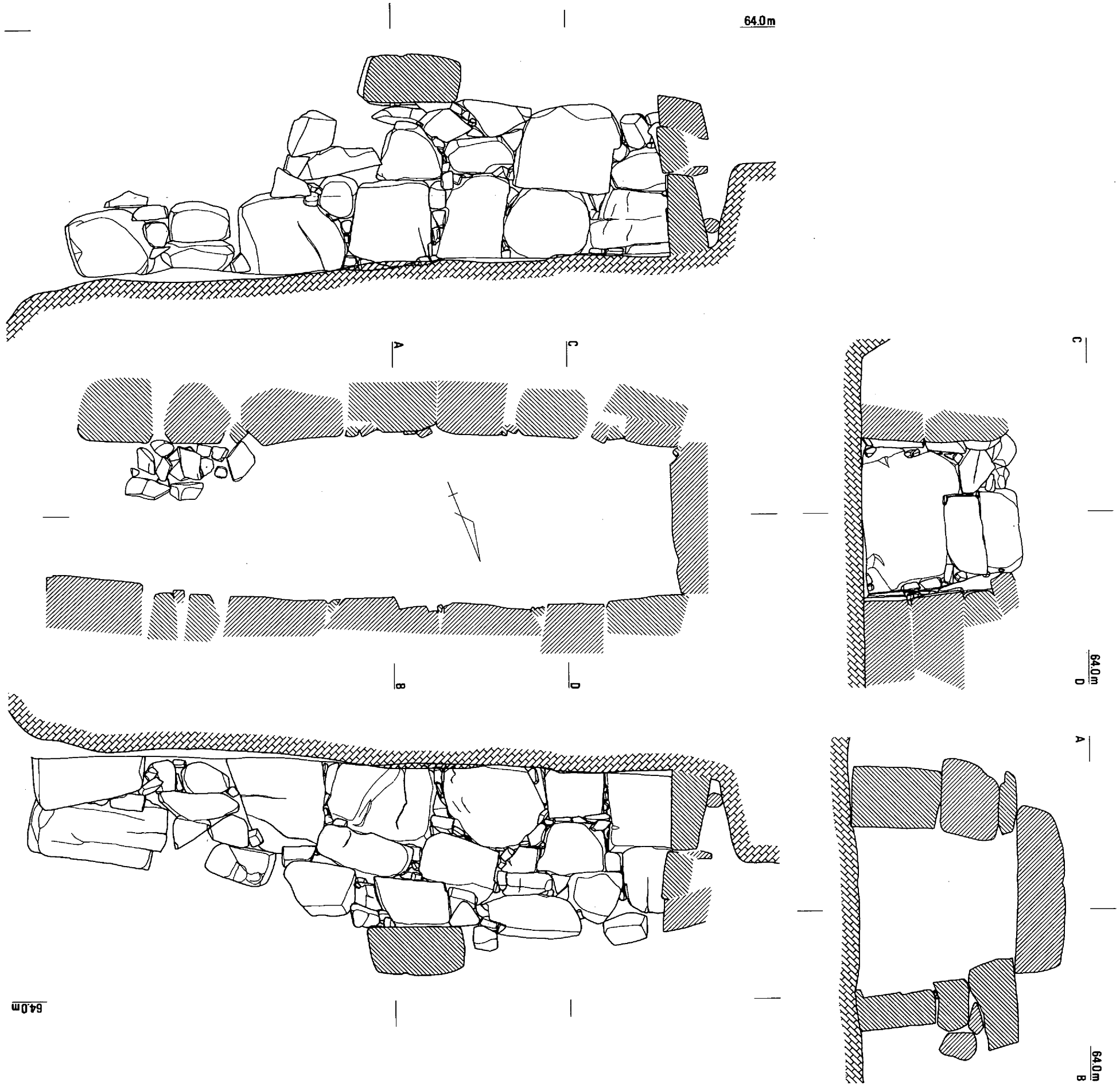
（１）　調査前の状況（第61図）



第61図　調査前地形測量図(1/300)



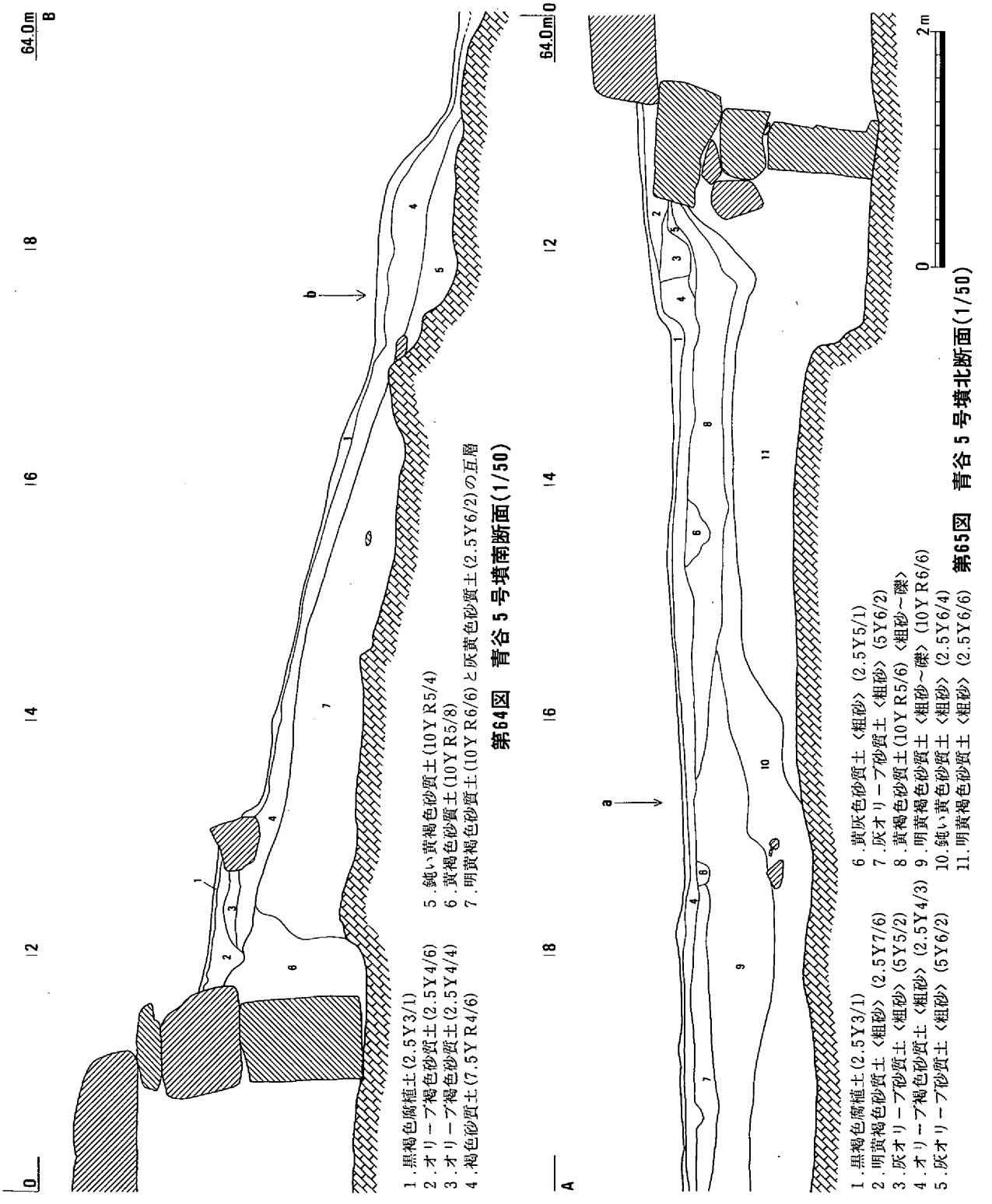
第62図　墳丘測量図(1/150)



※土層名は第66図と共通

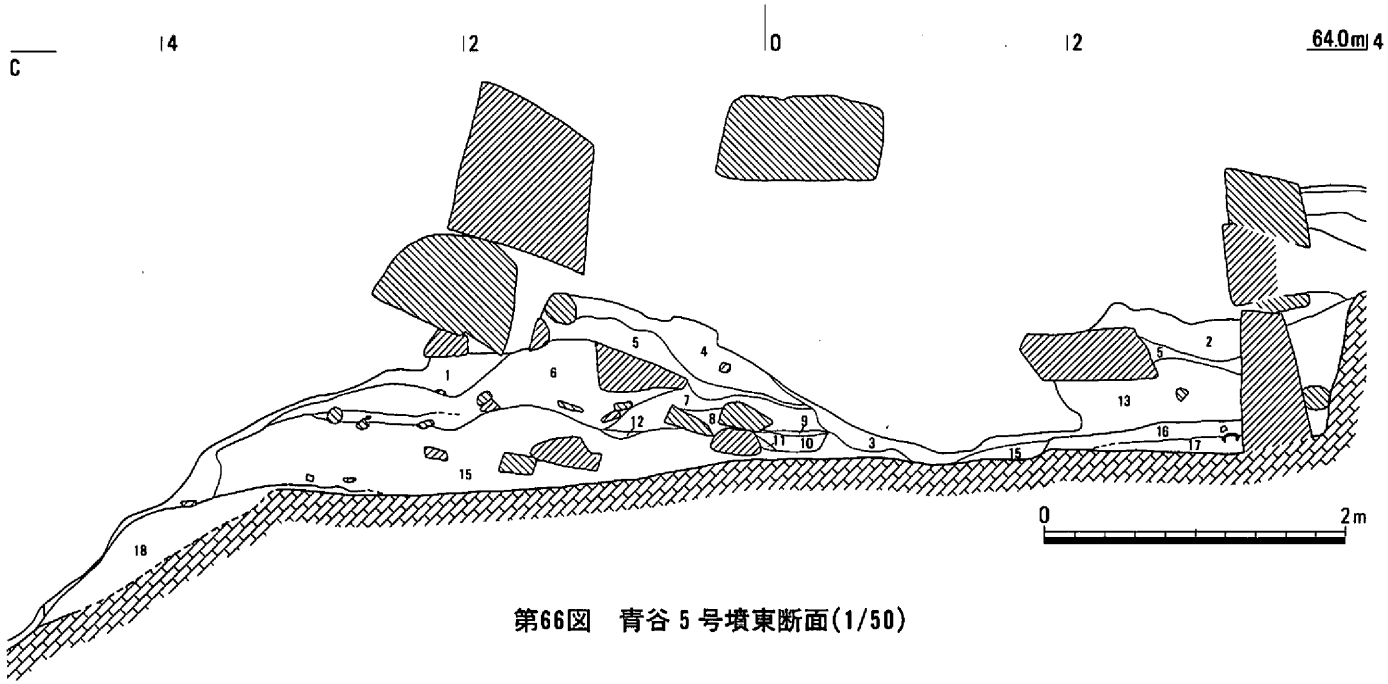
第63図　青谷5号墳石室(1/50)

笹が瀬川の西岸丘陵上標高約64mにあった青谷５号墳は、東に開口する横穴式石室を持つ古墳である。調査前の古墳は、石室が露出していて天井石のうち東側のものは側壁と共に石室内へ落ちこみ、奥壁付近にも天井石が落下していた。原位置を留めた天井石の直下は擂鉢状の窪地であった。石室内へは奥壁側から入れるが羨道側へは石材が折り重なっていて通れない。石室の北・西側は石室を『「』



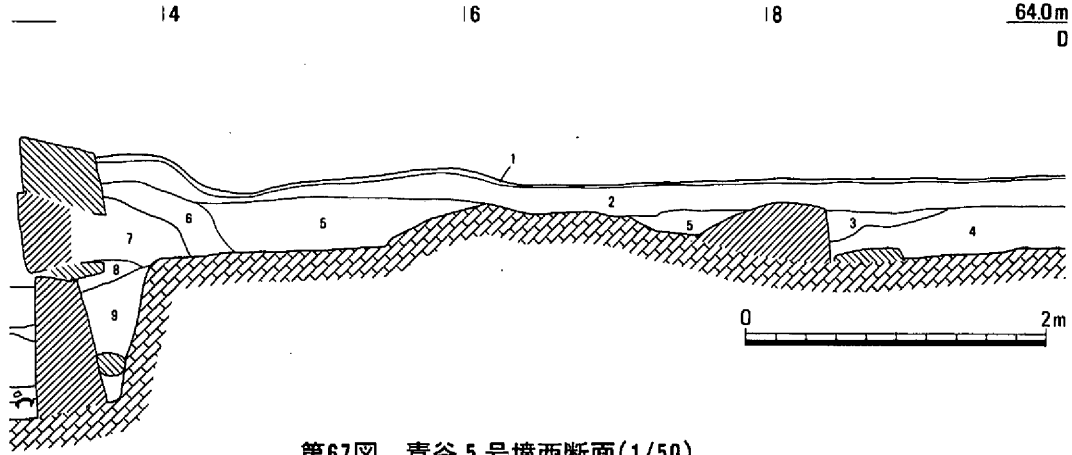
第64図　青谷５号墳南断面(1/50)

第65図　青谷５号墳北断面(1/50)



1．黒褐色砂質土(2.5Y3/2)
2．黄褐色砂質土〈粗砂〉(10YR5/6)
3．オリーブ褐色砂質土〈粗砂〉(2.5Y4/6)
4．黄褐色砂質土〈粗砂〉(2.5Y5/6)
5．暗灰黄色砂質土〈粗砂〉(2.5Y4/2)
6．明黄褐色粘質土～粘土(2.5Y7/6)
7．明黄褐色砂質土〈粗砂〉(2.5Y7/6)
8．浅黄色砂質土〈粗砂〉(2.5Y7/4)
9．暗黄灰色砂質土〈粗砂〉(2.5Y4/2)
10．明黄褐色砂質土〈粗砂〉(2.5Y6/6)
11．明黄褐色粘土(2.5Y7/6)
12．暗灰黄色砂質土〈粗砂〉(2.5Y4/2)
13．黄褐色砂質土〈粗砂〉(2.5Y5/4)
14．浅黄色細砂(2.5Y7/4)
15．黄褐色砂質土〈粗砂〉(10YR5/8)
16．明黄褐色砂質土〈粗砂〉(2.5Y6/6)
17．黄褐色砂質土〈粗砂〉(2.5Y5/4)
18．黄褐色砂質土〈粗砂〉(10YR5/8)と
　灰白色砂質土〈粗砂〉(2.5Y8/2)の互層

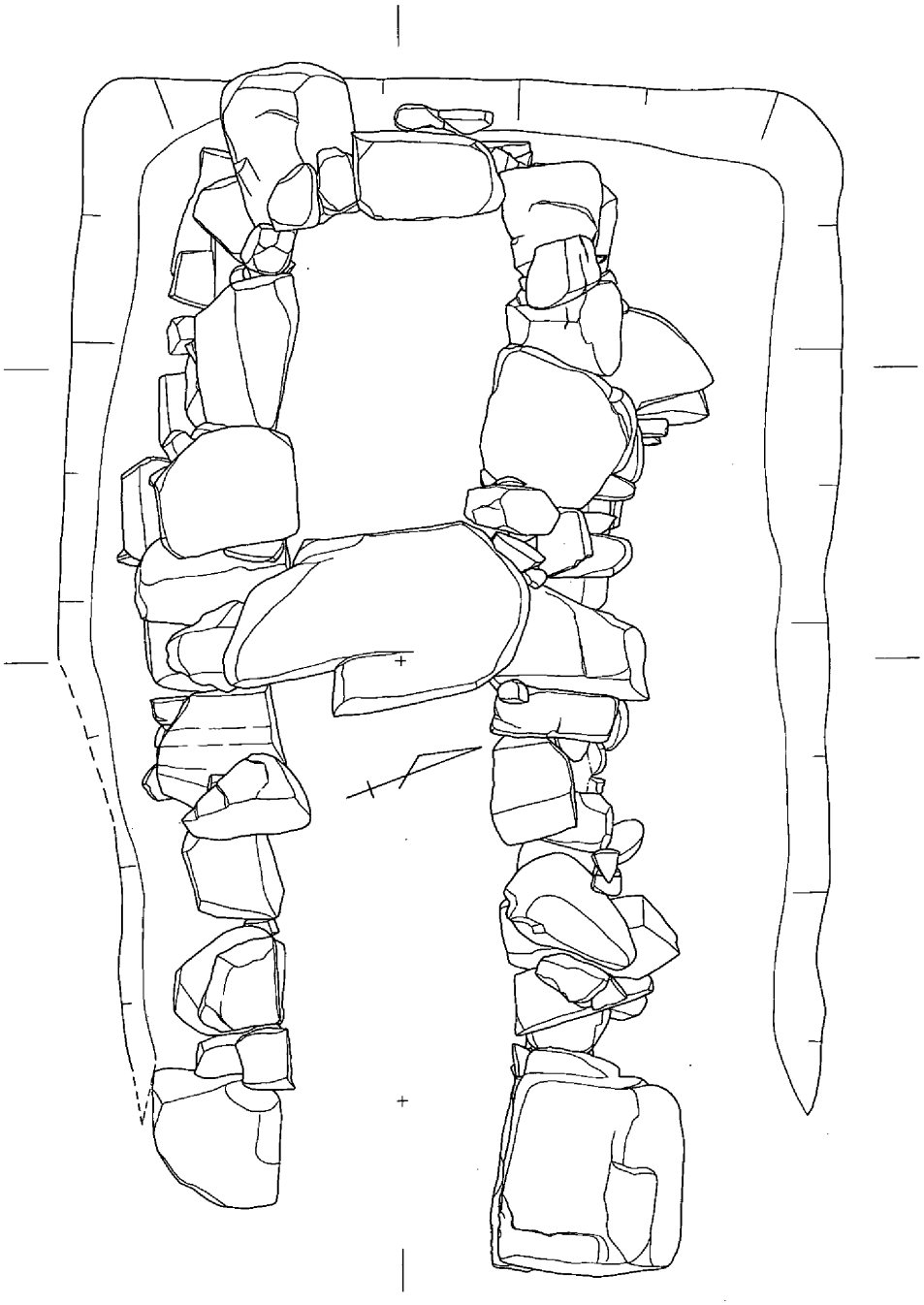
第66図　青谷5号墳東断面(1/50)



1．黒褐色腐植土(2.5Y3/1)
2．灰色砂質土〈粗砂〉(5Y6/1)
3．明黄褐色砂質土〈粗砂〉(10YR7/6)
4．浅黄色砂質土〈粗砂〉(2.5Y7/4)
5．黄橙色砂質土〈粗砂〉(10YR7/8)
6．明黄褐色砂質土〈粗砂〉(10YR7/6)
7．鈍い黄橙色砂質土〈粗砂〉(10YR7/4)
8．鈍い黄色砂質土〈粗砂〉(2.5Y6/3)
9．鈍い黄褐色砂質土〈粗砂〉(10YR6/4)

第67図　青谷5号墳西断面(1/50)

の字状に避けて水田となり、水田の南と西側には石垣が設けられていた。東側は山道で切断され、石室部分で高さ2mの法面になっていた。『横井村誌』には青谷5号墳石室略測図の石室東側部分に「破壊」と記述がある。



第68図　石室平面図(1/50)

(2) 墳丘

石室西側（第67図）では耕作土（2層）と造成土（3～6層）の下層で地山の花崗岩岩盤が露出した。盛土は土層断面では石室付近（7・8・9層）を除いて確認できなかった。

石室北側（第65図）では水田の土手造成土（6～9層）で墳丘が覆い隠されていた。墳丘端は図のaライン部分と考えられる。盛土（11層）は2cm程度の細かい互相状を呈する。土層で掘り方の立ち上がりが確認できなかったことから石材を置きながら盛土を施したものと考えられる。

石室南側（第64図）は斜面で、さらに石室付近に水田に伴う石列が築かれていたが、約2cm単位の互層をなす盛土（7層）が確認され、bラインを墳丘端と想定できた。掘り方は盛土上からで2段目の側壁の高さから掘りこまれている（第63図）。

石室東側（第66図）では盛土（18層）は石室奥壁から6.5mより東側で確認された。残存している側壁のうち東端の石材は盛土上に置かれている。このことから羨道部分はおそらく盛土に乗っていたものと思われる。周溝は北・南側に残り、北側の検出面で最大幅4m、底面で2mを測る。断面は逆台

形の可能性が高い。流路は地形の傾斜に沿って西から東へ流れるものと考えられる。

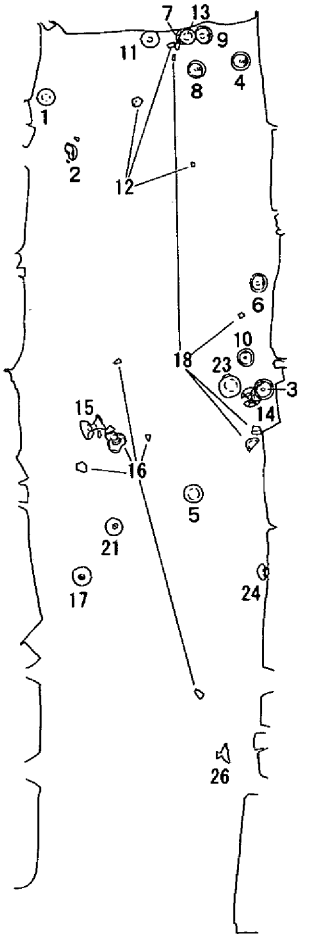
以上から、本墳の墳丘規模は直径15mの円墳と考えられる。

（３）　石室内の状況

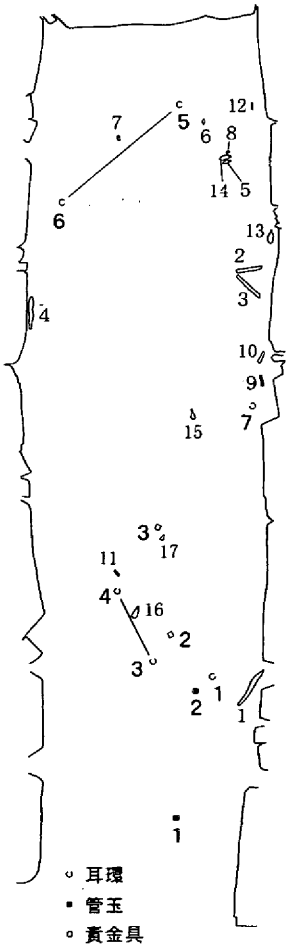
石室内土層（第63・66図）は埋土の攪乱が激しく、15層までは攪乱と判断した。奥壁付近の16層は石室再利用の整地面で、奥壁北隅で土師器の皿片**27・29**（第72図）が出土した。石室内は地山を整地しているが、攪乱のため断面では古墳時代の床面は検出できなかった。遺物出土状況（第69・70図）では奥壁付近と北側壁の一部に須恵器の集中が見られ、その部分では古墳時代の床面が残っている可能性がある。埋葬主体として考えられるものとして東側南壁の石敷（第63図）がある。南側壁に接し現状で長さ1.33m、幅0.6mを測る。形状は板石の上に長方形状の礫を置き、北側を礫で囲う形であり、おそらく棺台として機能していたと考えられる。石敷以外には埋葬主体は確認できなかった。遺物の出土状況は奥壁付近と北側壁の一部が古墳時代の配置の可能性がある。攪乱内から見つかった須恵器の中には**12・16**のように離れた位置から破片が検出されたものもある。耳環は奥壁付近で一対（**5・6**）、東側でも一対（**3・4**）が確認でき、本来の埋葬位置を反映しているものと考えられる。

（４）　石室（第63図）

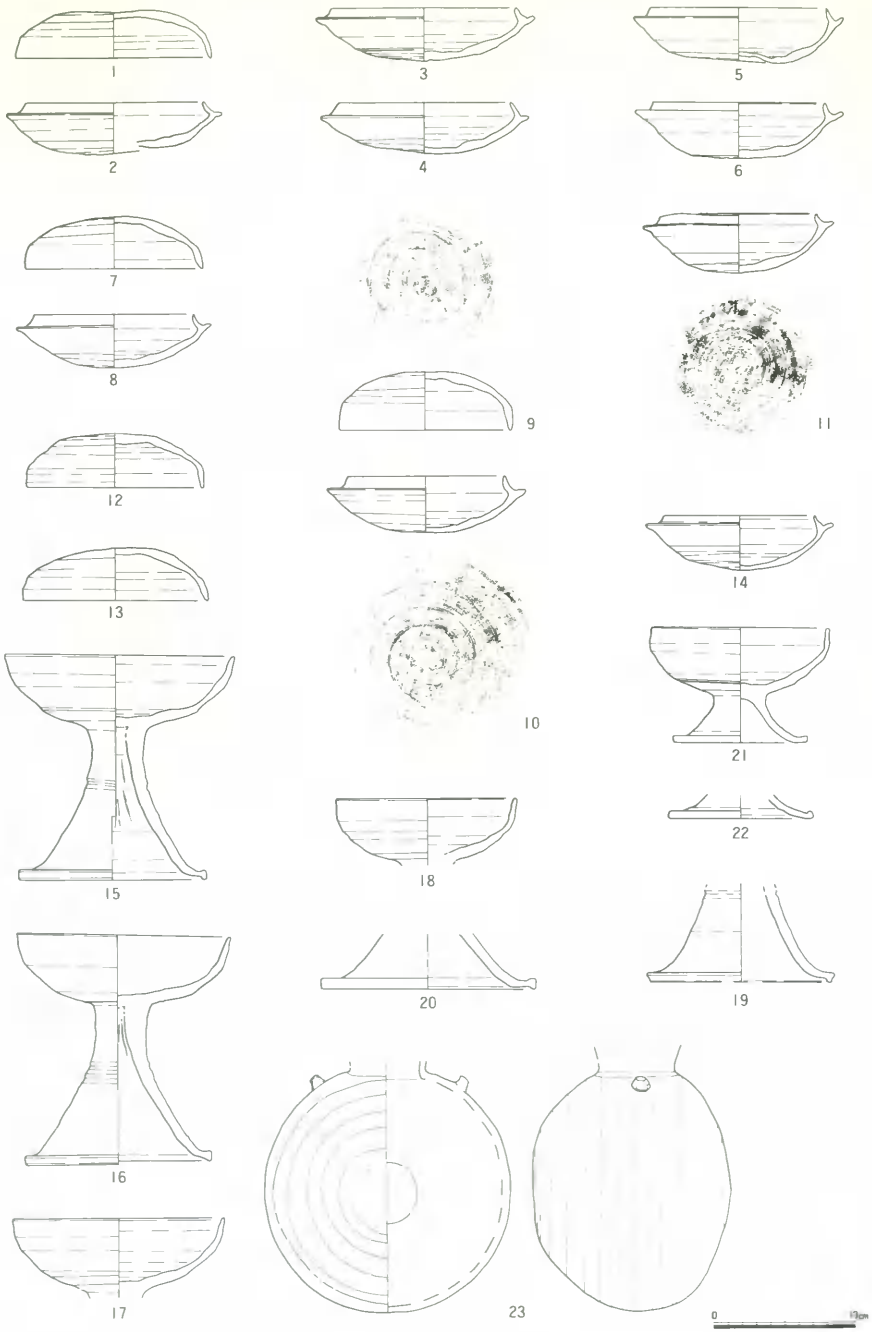
奥壁は天井石は乗っていないものの完全に残っていると考えられる。側壁では、奥壁から３m東までは上部の石材が残っている。入り口近くでは天井石の崩落に伴い外側へ崩れた部分も見られる。石材は付近に豊富にある花崗岩を使用し、他の種類は存在しない。羨道が残ってないため無袖かどうかは不明だが、平面形はやや胴張りで、南壁では奥壁から4.7mの所から基底部の並びの方向が変化して直線的になる。石室内の最大幅２m、奥壁幅1.7m、東端部幅1.55m、現存長7.15mを測る。高さは奥壁で1.85m、天井石が残る中央部分で1.82mである。奥壁は３段で、２段目以上は石室幅に合わないため南側に小振りの礫を充塡している。側壁は0.5～1.2m大の石材を積み、間をそれ未満の石材で充塡する。天井石は原位置を保つ１つと東側へ落ちこんだ１つ、奥壁近くへ落ちこんだ１つがある。原位置のもので2.1×1.2×0.55mを測



第69図　遺物出土状況・須恵器、土師器(1/60)



第70図　遺物出土状況・鉄器、その他(1/60)

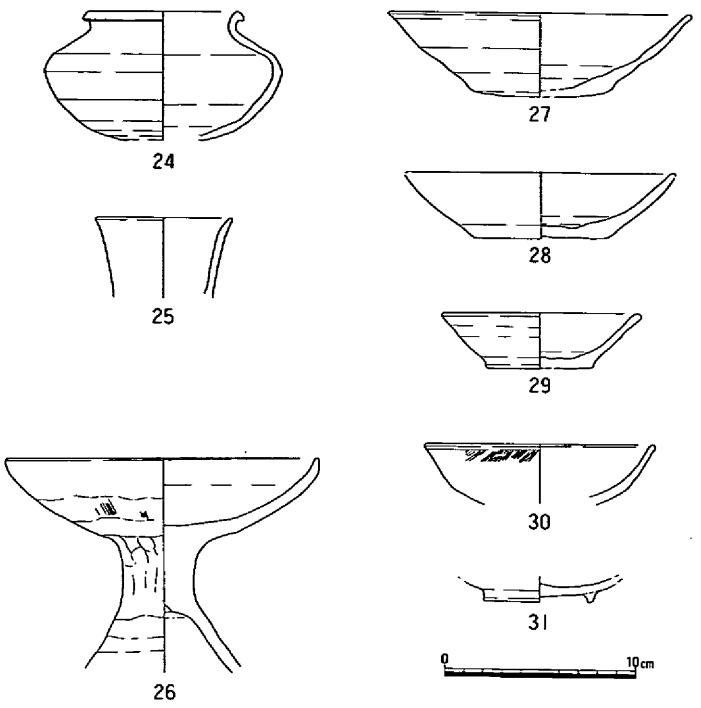


第71図　石室内出土須恵器(1/4)

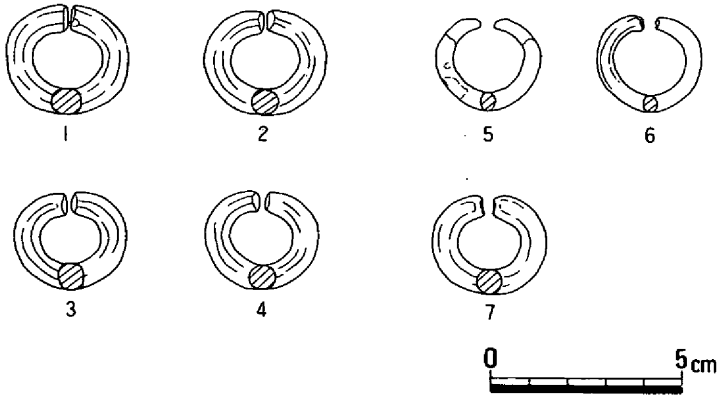
る。石室掘り方は検出面西側で5.2m、東側4.5mで深さは西側で１mある。

（５）　出土遺物

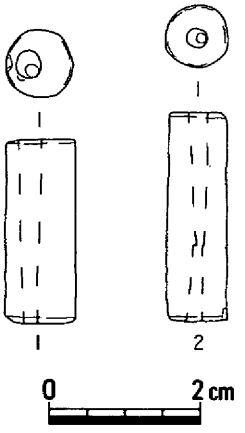
須恵器（第71・72図）は25個体を確認した。杯身・杯蓋は口径より**１・２**、**７・８**、**９・10**が一組になる可能性がある。蓋の口径が13.9cm、身が12.1cmまでの**１～４**、口径が12cm、器高が４cm程度の**５・６**、**５・６**より口径が狭い**11**、蓋口径12.0～12.9cmで身が11.0～11.2cmの**７～10・12・13**、口径が最も狭い**14**の５種類に分けられる。高杯は無蓋長・短脚がある。長脚の**15～20**は焼成甘く、脚外面沈線は凹線に近い。土師器は古墳時代の高杯**26**、古代の皿**27～29**、中世の早島式土器**30・31**がある。**27・29**は奥壁付近北側整地面から出土した。耳環（第73図）はいずれも銅地で１～４・７が銀貼りである。管玉（第74図）は２が凝灰岩質を呈する。刀装具（第75図）は全て銅地金張で、１は足金具、５は圭頭太刀の懸け通し穴金具と考えられる。出土状況のわかるものもあるがいずれも



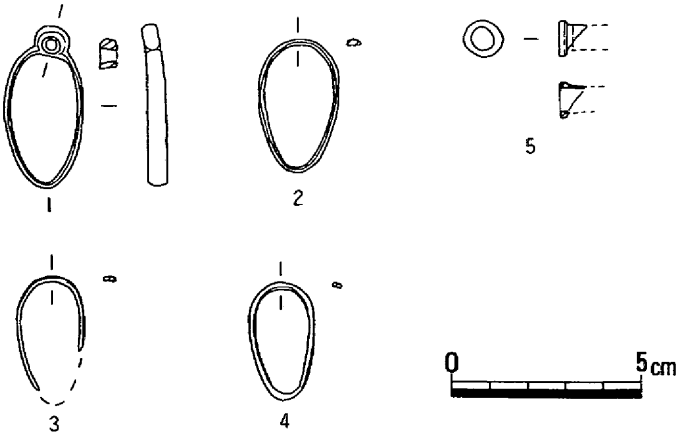
第72図　石室内出土須恵器・土師器(1/4)



第73図　石室内出土耳環(1/2)



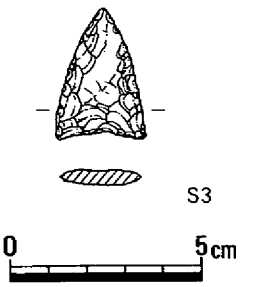
第74図　石室内出土管玉(1/1)



第75図　石室内出土刀装具(1/2)

第76図　石室内出土鉄器(1/3)

撹乱のため原位置を保っていない。鉄器（第76図）は多くが鉄片の状態で出土したため、原形をとどめるものは少ない。1～4は鉄刀、5～17は鉄鏃である。石室内混入（第77図）として石鏃と弥生中期末葉の土器片があり、周辺で弥生中期の何らかの活動があった可能性を指摘できよう。



第77図　石室内混入遺物(1/2)

第4章　ま　と　め

田益新田遺跡の遺構について

弥生時代前～中期末葉のものとしては土壙と溝、自然河道を検出した。この時期の微高地には集落は存在したが、頻繁に洪水が押し寄せたため安定した生活場所というにはほど遠い状態であったと考えられる。弥生時代前期以降の基盤層は黄褐色粘質土で、国作調査区では基盤層上に弥生時代中期の遺構が存在したが、宝仏調査区では弥生時代中期末葉まで河道が流れていた。安定した微高地が生成され集落が形成されるのは弥生時代後期末葉以降である。弥生時代後期末葉～古墳時代前半の遺構は灰褐色土層直下で建物、井戸、土壙と溝が検出された。灰褐色砂質土層中には古代の須恵器片が含まれることから、古代以降にほぼ現在の高さまで平らに削られたと考えられる。中近世の遺構は灰褐色砂質土上から掘りこまれた土壙1基と鋤痕である。

今回の調査では竪穴住居は検出できなかった。しかし建物のうち1×1間で柱間が2～3m程度のものがあり（建物3・4・10・11)、これらは住居の柱穴の可能性が考えられる。また井戸は弥生時代後期から古墳時代前期前葉に属するもので、井戸1・4のように埋土中に意図的な廃棄と考えられる土器が存在するものがある。このような土器群については同時期の一括廃棄と考えてよいだろう。

特に注目される遺構は方形の区画をなす宝仏調査区溝6である。溝の流路は建物8の柱穴列の方向と近似する事から双方の関連が想定できる。溝で囲まれた内部には柱穴は検出されたが建物は想定できなかった。このことより内部に存在する建造物はそれほど大規模でない可能性を指摘しておきたい。

田益新田遺跡の出土土器について

遺物は縄文時代後期から近世のものがある。掲載遺物は、遺構から出土し、残存状況が良好で実測可能なものである。同一器種・種類と思われるものは代表的なものを選んだ。以下、特に出土量の多い弥生時代後期末から古墳時代前半前葉の土器についてまとめてみた。

井戸1・3、土壙4・9出土土器では、壺・甕・鉢は、口縁が2重口縁で極端に直立せず、外面は横ナデのみですませる(**10・16・25**)。高杯は短脚で、椀形の杯部を持つものは口縁部と杯部の境が明確なものがある(**18**)。タタキメを外面に留める甕**17**も見られる。これらは才の町Ⅰ～Ⅱ式に相当し、弥生時代後期末葉の土器群として設定できる。

一方井戸4・土壙8では2重口縁壺**125**、小形丸底壺**130**があり、2重口縁甕では外面の立ち上がり部分下に張り出しがある溝6**145**に対し消失する**102**、**146**がある。鉢**114**は口縁部と体部の間の陵がはっきりしている。これらは下田所式に相当し、古墳時代前半前葉の土器群と考えられる。

溝3・6では弥生時代後期末葉に相当するものが多く、古墳時代前半前葉と考えてよいものとしては壺**46**、高杯**160・165・168**、鼓形器台**85・182**のように新しく出現した器種・種類が挙げられる。漸移的に変化している壺・甕についての弥生時代後期末葉と古墳時代前半前葉の区別は、一括性の高い遺構での全体比較で行うべきである。溝3・6の出土状況は一括性の高いものではあるが、出土土器を弥生時代後期末葉と古墳時代前半前葉に明確に区別するのは困難である。

青谷５号墳について

墳丘は直径15mの円墳で周溝を持っていた。盛土は１単位２cm程度の細かい互相状を呈し、最大1.5mの厚さで残っていた。本来の厚さは石室周辺の耕作による改変のため明らかにはできなかった。石室南側の盛土には掘り方が存在するが北側では確認できなかった。このことから石室構築の過程が南側と北側で異なる可能性が指摘できよう。

横穴式石室は長さ7.15m以上、最大幅２mを測る。石室はやや胴張りで南壁で奥壁から4.7mの所より東は方向が変化して直線的になることから、奥壁から4.7mまでを玄室と考えることもできよう。側壁・奥壁の積み方は加工度の低い石材を用いるため乱雑である。天井石が１つだけ原位置で残っていたため側壁の残存状態が明確になった。長さは墳丘の規模から推測して10m程度ではないかと思われる。また石室内には石敷があり、埋葬施設と考えられる。これには耳環３・４が伴う可能性が高い。

立地については尾根の中央を避け、平坦面の東寄りに位置する。築造当時は田益新田・田中遺跡方向から目立つものであったと考えられる（写真図版５上参照）。

遺物の出土状況は、奥壁の**4・7～9・11・13**と北側壁の**3・6・10・14・23**、南側壁の**1・2**の３群とその他に分けられる。南側壁の杯蓋**1**と杯身**2**は口径が最も大きく扁平な作りで、陶邑編年ＴＫ43新相（Ａ群）、続いて奥壁・北側壁のうち**3～11・13・14**が外面に回転ヘラ削りが施され、内面の仕上げナデが見られるものが多くＴＫ209の古相（Ｂ群）に相当すると考えられる。その他の出土状況を示すものでは、提瓶は取っ手が痕跡化しカキメが省略され簡略化が進行している。これと短脚高杯はＢ群に伴うと考えられる。無蓋長脚高杯は焼成甘く脚部透かしはないなどさらに簡略な形態であるから、さらに時期が下るか、あるいは産地が異なるかいずれかの理由があるものと考えられる。

周辺の古墳のうち青谷３号墳[1]は青谷５号墳の西１つ隔てた尾根上に築かれている。墳丘規模は直径20m、高さ３mの円墳である。横穴式石室は南に開口し無袖で全長8.0m、高さ２mあまり、玄室巾1.8m、羨道巾1.1mを測り、閉鎖施設が遺存している。青谷３号墳は1965年に調査の際須恵器、鉄器、玉類、人骨、金環等多数多量に出土し数体分の埋葬が行われたものと認められたようである。須恵器のうち杯蓋・杯身では杯蓋口径が15cmに達するもの、杯蓋口径が13cm程度で外面ヘラケズリのもの、口径は同程度でヘラ切り未調整のものが見られる。前者は青谷５号墳のＡ群より古く、後２者はＢ群と類似する。３号墳の遺物は青谷５号墳以前のものを含むことから３号墳が５号墳に先立って築造された可能性を指摘できるが、５号墳は攪乱が激しく、３号墳は詳細が不明であることから断言は避けたい。また５号墳の北西、５号墳が乗る尾根の西側の谷の奥に横穴式石室１基がある。「青谷古墳群２号墳[2]」と考えられ、南に開口する横穴式石室の後半部だけが残存している。奥壁１枚、天井石１枚が残り、石室幅1.7mを測る。時期は不明である。

青谷５号墳からは圭頭太刀を含む遺物が出土し、石室の規模からも古墳群の中では３号墳と並ぶ大きさである。丘陵上に立地し６世紀末からの築造の可能性が高い５号墳は、やや小規模ではあるが現在の田益集落周辺の首長の墓であったことが考えられるのである。

註

（１）角田　茂・近藤義郎ほかによって1965年４月に調査が行われた。

　近藤義郎・新納　泉両氏のご協力を得て遺物実測図と遺物を実見しました。

（２）角田　茂調査の「岡山県埋蔵文化財包蔵地調査カード」による。

田益新田遺跡土器観察表

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色名	特徴など	遺構名	旧遺構名
1	弥生土器	甕	32.4			灰白色	中期前葉	土壙1	土器棺1
3	弥生土器	甕				淡黄色	前期	溝1	溝3
7	弥生土器	壺	21.0			鈍い黄橙色		建物1	建物1
13	弥生土器	台付鉢	11.9	7.9	5.0	灰黄色		井戸1	井戸1
18	弥生土器	高杯	13.5	11.5	12.9	灰白色	水こし粘土	井戸3	井戸3
19	弥生土器	高杯	12.8	10.0	11.7	灰白色		井戸3	井戸3
23	弥生土器	鉢	12.6	6.1	3.9	灰白色		井戸3	井戸3
24	弥生土器	鉢	10.9	10.4	3.9	橙色		井戸3	井戸3
25	弥生土器	鉢	27.1	24.9	7.0	灰白色		井戸3	井戸3
29	弥生土器	高杯	18.8			鈍い黄橙色		土壙4	井戸2
32	弥生土器	高杯	15.6			鈍い橙色		柱穴1	3-ア+10 P1
37	弥生土器	甕	16.9			灰白色		柱穴2	4+10-A P1
40	弥生土器	壺	22.8			灰白色		溝3	溝2
41	弥生土器	壺	20.8			灰白色		溝3	溝2
45	弥生土器	壺	14.5			橙色		溝3	溝2
46	土師器	壺	14.0			灰白色		溝3	溝2
48	弥生土器	甕	15.0		4.0	黄灰色		溝3	溝2
50	弥生土器	甕	15.5		4.3	浅黄橙色		溝3	溝2
60	弥生土器	甕	16.4			鈍い橙色		溝3	溝2
62	弥生土器	甕	16.0			灰白色		溝3	溝2
64	弥生土器	高杯	17.8			橙色	内外面風化	溝3	溝2
65	弥生土器	高杯	17.9			赤橙色	内外面風化	溝3	溝2
66	弥生土器	高杯	16.3			淡黄色		溝3	溝2
69	弥生土器	高杯	12.4			灰白色		溝3	溝2
79	弥生土器	台付鉢	13.9			浅黄橙色		溝3	溝2
80	弥生土器	鉢	30.1			灰白色		溝3	溝2
82	弥生土器	台付鉢	15.7	9.3	5.5	灰白色	水こし粘土	溝3	溝2
83	弥生土器	鉢	4.9	3.7	1.4	灰白色	手づくね	溝3	溝2
85	土師器？	鼓形器台			22.3	淡黄色		溝3	溝2
87	弥生土器	壺	26.4			鈍い黄橙色		河道2	河道1
91	弥生土器	甕				灰白色		溝4	溝10
92	縄文土器	深鉢				鈍い黄灰色	C形刺突文	河道3	河道3
93	縄文土器	浅鉢				黒色	波状口縁	河道3	河道3
94	弥生土器	甕	17.6			灰黄橙色	内面ヘラミガキ	河道3	河道3
98	弥生土器	器台	23.6			淡黄色	中期末葉	河道4	河道2
99	弥生土器	壺				鈍い橙色		建物8	建物1P8
100	弥生土器	甕			3.7	灰黄褐色		建物9	建物2P6
101	土師器	甕	11.8	19.2		鈍い黄褐色	ほぼ完形	建物10	建物3P3
102	土師器	甕	15.3			灰黄褐色		井戸4	土壙4
108	土師器	高杯	12.2			鈍い橙色	水こし粘土	井戸4	土壙4
114	土師器	鉢	15.1	7.4		灰黄色	完形品	井戸4	土壙4
115	土師器	甕	18.5	11.0		淡黄色	完形品	井戸4	土壙4
116	土師器	甕	7.8	9.9		灰白色	完形品	井戸4	土壙4
117	土師器	鉢	8.9	5.5	3.4	淡黄色		井戸4	土壙4
118	土師器	甕	7.6	7.8		灰白色		井戸4	土壙4
119	土師器	甕	6.4	8.0		灰白色	手づくね	井戸4	土壙4
124	土師器	製塩土器			4.5	灰白色		土壙7	土壙9
125	土師器	壺	18.9			灰白色		土壙8	土壙1
126	土師器	甕	13.4			鈍い橙色	完形品と推定	土壙8	土壙1
127	土師器	高杯			18.3	橙色		土壙8	土壙1
128	土師器	鉢	12.7	5.8		浅黄橙色	内外面風化	土壙8	土壙1
129	土師器	鉢	14.5	8.2		灰白色	外面工具ナデ	土壙8	土壙1
130	土師器	壺	12.0	9.1		橙色	小型丸底壺	土壙8	土壙1
131	弥生土器	甕	13.8			鈍い黄橙色		土壙9	土壙5
136	弥生土器	壺	17.8			灰黄色		溝6	溝7
137	弥生土器	壺	21.8			淡黄色	櫛描文5条1単位	溝6	溝7
148	弥生土器	甕	16.0			浅黄橙色		溝6	溝7
157	弥生土器	甕？			7.3	鈍い褐色	底面木葉圧痕	溝6	溝7
158	弥生土器	高杯	16.4			灰黄色	水こし粘土	溝6	溝7
159	弥生土器	高杯	17.8			鈍い橙色	水こし粘土	溝6	溝7
160	土師器	高杯	11.9			鈍い橙色	水こし粘土	溝6	溝7
161	弥生土器	高杯	11.7	9.1	13.8	橙色	内外面風化、水こし粘土	溝6	溝7
165	土師器	高杯			14.8	灰白色	水こし粘土	溝6	溝7
169	弥生土器	鉢	39.1			灰白色	内外面風化	溝6	溝7
173	弥生土器	鉢	11.8	9.5	3.9	褐灰色	底面ヘラミガキ？	溝6	溝7
175	弥生土器	台付鉢	12.4			橙色		溝6	溝7
182	土師器？	鼓形器台	18.4	12.8	17.4	橙色		溝6	溝7
183	弥生土器	蓋				浅黄橙色		溝6	溝7
185	土師器	甕				浅黄橙色		溝10	溝1
187	弥生土器	高杯			12.6	鈍い黄橙色	内面線刻2ヶ所	溝7	溝2

青谷 5 号墳土器観察表

番号	種　別	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色　名	特　　徴
1	須恵器	杯蓋	13.9	3.4		灰色	天井外面ヘラケズリ（右）
2	須恵器	杯身	12.4	3.7		灰色	底外面ヘラケズリ（左）
3	須恵器	杯身	12.9	3.8		灰白色	内面中央仕上げナデ
4	須恵器	杯身	12.1	3.7		青灰色	底外面ヘラケズリ（左），内面中央仕上げナデ
5	須恵器	杯身	12.2	3.9		暗青灰色	底外面ヘラケズリ（右），内面中央仕上げナデ
6	須恵器	杯身	11.9	4.0		灰色	回転ヘラ切り（左）
7	須恵器	杯蓋	12.5	3.7		オリーブ灰色	天井外面ヘラケズリ（左）
8	須恵器	杯身	11.2	3.8		灰色	内面中央仕上げナデ，歪み少し有
9	須恵器	杯蓋	12.0	4.2		灰白色	天井外面ヘラケズリ（右），内面中央仕上げナデ，歪み有
10	須恵器	杯身	11.0	4.0		灰白色	底外面ヘラケズリ（右），ヘラ記号
11	須恵器	杯身	10.3	4.3		暗青灰色	底外面ヘラケズリ（左），内面中央仕上げナデ，歪み有
12	須恵器	杯蓋	12.3	3.9		灰色	天井外面ヘラケズリ（左），内面中央仕上げナデ
13	須恵器	杯蓋	12.9	3.7		オリーブ灰色	内面中央仕上げナデ
14	須恵器	杯身	10.5	3.9		暗青灰色	内面中央仕上げナデ
15	須恵器	無蓋高杯	16.2	16.0	13.1	灰色	杯内面中央仕上げナデ
16	須恵器	無蓋高杯	14.3	15.0	12.8	灰白色	杯底外面ヘラ切り後ヨコナデ，杯内面中央仕上げナデ
17	須恵器	無蓋高杯	14.8			灰白色	杯底外面ヘラケズリ（左）
18	須恵器	無蓋高杯	12.2			灰色	杯底外面ヘラケズリ（左），歪み有
19	須恵器	高杯			12.6	灰白色	
20	須恵器	高杯？			14.9	灰白色	
21	須恵器	無蓋高杯	12.2	8.2	8.1	灰色	杯底外面ヘラケズリ（左），歪み有
22	須恵器	高杯			9.8	灰色	全体に歪み
23	須恵器	提瓶				灰色	正面ナデ，背面ヘラケズリ（左）
24	須恵器	壺	7.7			灰色	底外面ヘラケズリ（左）
25	須恵器	提瓶？	7.0			灰色	
26	土師器	高杯	16.0			橙色	杯外面ハケメ後ナデ，杯内面ナデ
27	土師器	皿	15.6	4.5	7.0	鈍い黄橙色	底面回転ヘラ切り
28	土師器	皿	13.9	3.6	7.0	鈍い褐色	底面回転ヘラ切り（右）
29	土師器	皿	10.1	3.0	4.6	浅黄橙色	
30	土師器	皿	11.8			淡黄色	
31	土師器	皿			5.4	浅黄橙色	

青谷 5 号墳鉄器観察表

番号	器　種	型　式	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	鉄刀		25.4	3.0	0.9	122.6
2	鉄刀		25.2	3.0	0.8	155.3
3	鉄刀		18.2	2.3	0.8	85.5
4	鉄刀		25.5	2.6	1.0	112.6
5	鉄鏃	長頸柳葉式	6.4	1.3	0.5	7.1
6	鉄鏃	長頸柳葉式	4.4	1.4	0.5	4.4
7	鉄鏃	長頸柳葉式	3.7	1.3	0.5	3.8
8	鉄鏃		2.5	1.0	0.6	3.2
9	鉄鏃		9.5	0.9	0.4	7.5
10	鉄鏃		9.5	0.9	0.4	5.5
11	鉄鏃		6.6	0.7	0.5	3.5
12	鉄鏃		5.6	0.8	0.6	5.3
13	鉄鏃	柳葉式	10.3	3.1	0.5	20.1
14	鉄鏃	長三角形式	14.9	3.0	0.5	21.7
15	鉄鏃	圭頭式	8.1	3.4	0.5	22.8
16	鉄鏃	方頭式	8.4	3.9	0.6	28.5
17	鉄鏃	方頭式	6.8	3.0	0.6	15.6

青谷 5 号墳金属器観察表

刀装具

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴など
1	足金具	4.28	2.03	0.50	3.18	銅地金張
2	責金具	3.53	2.12	0.38	1.88	銅地金張
3	責金具		1.81	0.34	0.87	銅地金張
4	責金具	3.10	1.76	0.27	1.14	銅地金張
5	懸け通し孔金具	0.92	1.02		0.30	銅地金張

装身具

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴など
1	耳環	2.89	3.16	0.83	24.16	銅地銀張
2	耳環	2.82	3.14	0.82	24.55	銅地銀張
3	耳環	2.57	2.92	0.69	17.27	銅地銀張
4	耳環	2.61	2.92	0.75	17.68	銅地銀張
5	耳環	2.45	2.72	0.42	5.47	銅地
6	耳環	2.53	2.75	0.40	6.87	銅地
7	耳環	2.65	2.96	0.65	16.99	銅地

田益新田遺跡石器観察表

番号	出土遺構	器　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	残　存
S1	溝3	太型蛤刃石斧	80.5	71.0	46.5	378.2		欠
S2	河道4	剥片	31.5	14.5	2.0	1.0	サヌカイト	完

青谷 5 号墳石器観察表

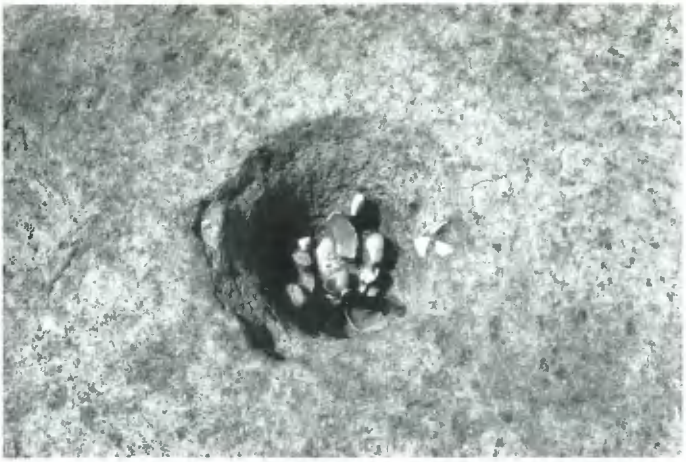
番号	出土遺構	器　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	残　存
S3	石室内	石鏃	34.5	23.5	4.2	3.0	サヌカイト	完

報告書抄録

ふりがな	たますしんでん　あおだに
書名	田益新田遺跡　青谷5号墳
副書名	一般県道岡山・賀陽線（吉備新線）建設に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	112
編著者名	氏平昭則
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-01　岡山県岡山市西花尻1325-3　Tel　086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700　岡山県岡山市内山下2-4-6　Tel　086-224-2111
発行年月日	西暦　1996年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査要因
田所新田遺跡（たますしんでんいせき）	岡山県（おかやまけん）岡山市（おかやまし）田益（たます）1358他	33201		34度 42分 37秒	133度 54分 12秒	19930401 ～ 19930910	2070	吉備新線建設工事に伴う事前調査
青谷（あおだに）5号墳	田益（たます）374-2			34度 42分 34秒	133度 53分 54秒	19940401 ～ 19940712	383	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田益新田遺跡	集落	弥生前期～中期	土壙3基・溝3条 河道4条	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、備前焼	
		弥生後期～古墳前半	建物11棟・井戸4基 土壙5基・溝8条		
		中・近世	土壙1基		
青谷5号墳	古墳	7世紀初め	横穴式石室墳1基	須恵器、土師器、鉄器、耳環、管玉、刀装具	

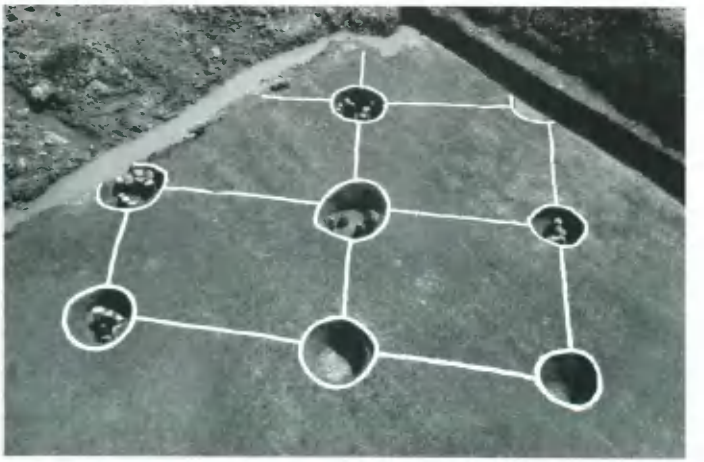


井戸 1
（南から）

建物 1・溝 2
（北から）

建物 2・溝 3
（北東から）

写真図版 2



建物 8
（北西から）

土壙 8
（北から）

溝 4・5・6
（西から）

建物1・10、井戸1・3・4、土壙1・4、溝3、柱穴1
出土土器(1/4、一部1/6)

井戸４、土壙８、溝６・７　出土土器(1/4、一部1/6)

遠景
（南東から）

調査前状況
（北から）

墳丘検出状況
（西から）

写真図版 6

石室内中央
（西から）

石室内奥壁付近
（西から）

石室
（東から）

1

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

21

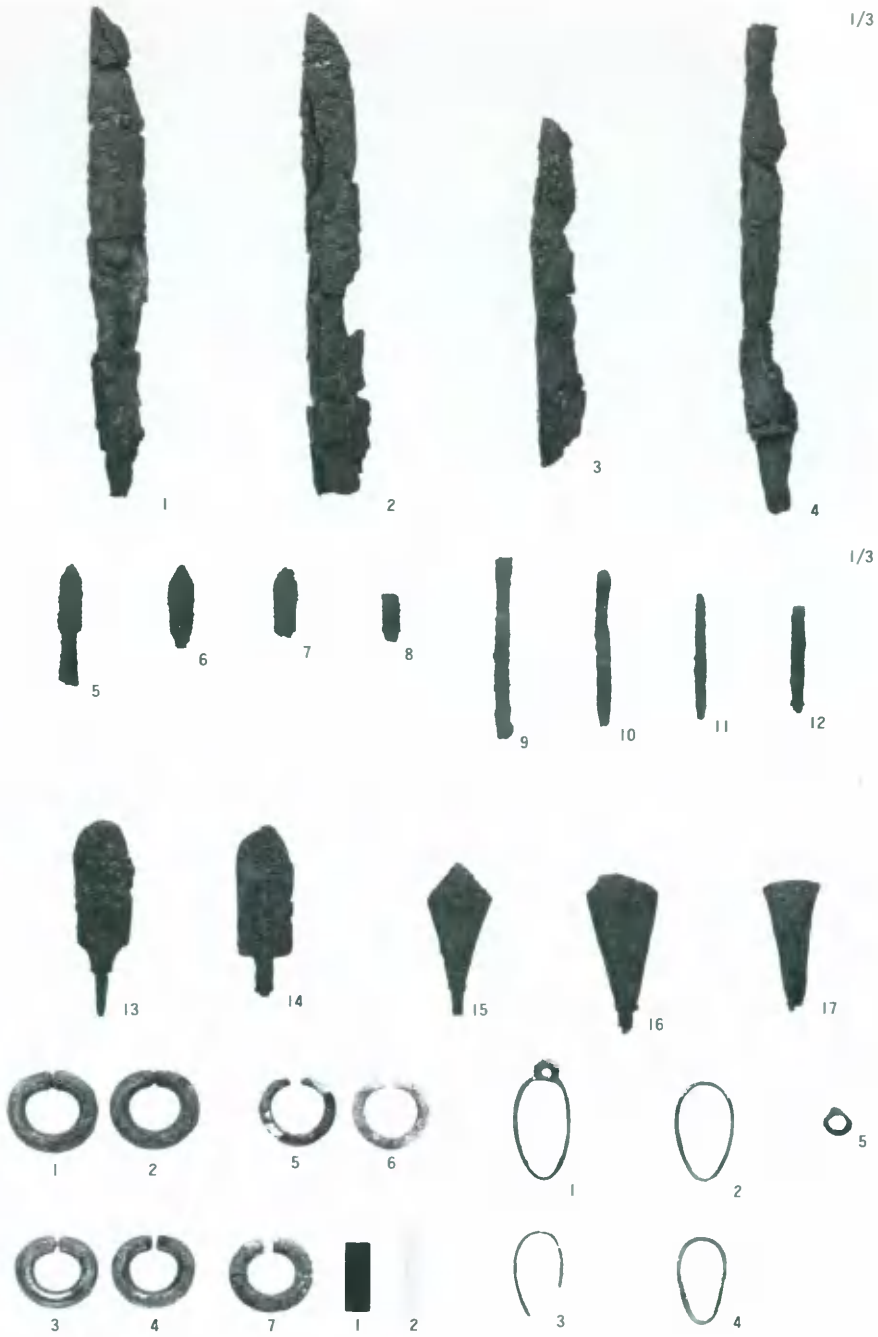
26

23

24

29

須恵器・土師器(1/4)



鉄器(1/3)、耳環・管玉・刀装具(1/2)

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告112

田益新田遺跡
青谷5号墳

一般県道岡山・賀陽線（吉備新線）
建設に伴う発掘調査

1996年3月20日　印刷
1996年3月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印　刷　山陽印刷株式会社